九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

金鍾漢論

藤石，貴代
九州大学大学院文学研究科

https://doi.org/10.15017/24605

出版情報：九州大学東洋史論集. 17, pp.157-222, 1989-01-25. 九州大学文学部東洋史研究会
バージョン：
権利関係：

金鍾漢論

藤石貴代

一　はじめに

金鍾漢（キムジョンハン）（一九一四―四四）は、親日派詩人として朝鮮の文学史では殆ど忘却され、日本では朝鮮人文学者が日本語で作品を書いたことすら一般には知られていない。

親日派とは、日本による併合以後植民地支配下の朝鮮において、日本の統治に同調した朝鮮人を指す呼称である。その意味で、親日文学とは、『親日文学論』の著者である林鍾國氏に依れば、朝鮮人としての「主体的条件を没却した盲目的事大主義的日本礼讃・日本追従を内容とした文学であり、ひいては売国的文学という意味も含められる」[1]ものとされている。

朝鮮近現代文学史において、一九四〇年前後より一九四五年八月十五日に至る約五年間は、暗黒期あるいは空白期と呼ばれることが久しかった。その理由の一つは、戦局の推移に伴って日本の植民地支配がこの時期一層強化され、朝鮮が暗澹たる状態にあったこと、もう一つは、朝鮮語・朝鮮文学への弾圧の結果、この時期の文学を代表することになった〈国民文学〉が、総じて対日協力の文学という意味合いを持ち、「解放」後の朝鮮文学においては、それらの作品は親日文学として否定されねばならなかったことである。[2] したがって、この時期の文学を空白期として黙殺しないまでも、抵抗か親日かという選択の結果として、単に称賛あるいは断罪するという傾向も根強い。朝鮮動乱で資料が散逸したこともあって、この時期に活躍した個々の作家の伝記はおろか、著作さえ未だ充分に整理されていない状態である。

金鍾漢は、〈国民文学〉を主導した文芸雑誌『國民文學』の編集に携わったこと、代表的親日作品の一つと見做されている日本語詩「園丁」を書いたこと、日本語による第一詩集『たらちねのうた』を刊行したこと等から親日派に分類され、彼

も彼が遺した作品群も看過されてきた。本国での評価にしたがって、日本で出版されたいくつかの朝鮮の詩のアンソロジーにも、鍾漢の詩は一篇も収録されていない。

筆者の知るかぎり、これまで金鍾漢について書かれたものには次のようなものがある。

①牧洋（李石薫）「金鍾漢の人及作品」（『國民文學』一九四四・一一）
②鄭飛石「落花の賦」（『國民文學』一九四五・一）
③金達寿「太平洋戦争下の朝鮮文学―金鐘漢の思い出を中心に」（『文学』一九六一・八）
④柳呈「好漢弧獨　金鍾漢」（『現代文學』一九六三・二）
⑤林鍾國『親日文學論　日帝暗黒期의作家와作品』（一九六六　平和出版社）
⑥大村益夫「金鍾漢について」（旗田巍先生古稀記念会編『朝鮮史論集　下巻』一九七九　龍渓書舎）
⑦川村湊『「酔いどれ船」の青春　もう一つの戦中・戦後』（一九八六　講談社）

はじめの四篇は、先輩・同僚・友人・後輩として金鍾漢を回想したものであり、生身の彼の姿を彷彿させてくれる貴重な資料である。『親日文學論』は、親日文学の様相・本質・理念・活動状況等を究明したもので、特に金鍾漢の人間及び作品の本質を詳論したものではなかった。大村益夫氏の論文は、「こんごの本格的金鍾漢論展開のための一つの準備作業」[3]として、金鍾漢研究の端緒を開いたものである。川村湊氏の著作は、田中英光の小説「酔いどれ船」を手掛かりとして「近代の朝鮮文学史と日本文学史の交差、交錯する問題点」[4]を論じたものであるが、その中で鍾漢の詩に触れ、鍾漢の朝鮮語詩が「朝鮮の「土に徹する」ことによって、民族の起死回生の願いを孕んだ表現として、その地の文学史に記憶されておいてもよい」[5]ものであると指摘している。

本稿は、直接には大村益夫氏の論考を継承し、当時の朝鮮文学と朝鮮人知識人が置かれた状況において、金鍾漢という詩人を再評価しようとする試みである。

二　生涯と時代背景

1、生い立ち

金鍾漢は、一九一四年二月二十八日、咸鏡北道明川郡西面立石洞に生まれた。「私の故里は、鰯の名産地咸北である。漁大津から六里。清津から二十里。山里ではあるが、新鮮な魚類で育つた幼年であつた」[6]。生家は百姓であったが、六歳の春に彼は、医師であつた伯父のところへ養子に行く。「六つの春、お醫者さんであつた父が清津で開業したので、私も港の子になつた。（中略）四十の若さで他界した父が、最後に開業したのは、雄基の港であつた。當時、鏡城中學に通つてゐた私は、夏休はきまつて雄基の港で過した」[7]。

幼年時代について、金鍾漢は第一詩集『たらちねのうた』の「あとがき」の中では次のように記している。

醫師であつた養父は厳格な理性人だつたが、養母は子供のない中年の婦人にありがちな偏執狂的な愛情の持主だつた。そのごろから、生母と養母との間には、私を中心とする愛情の爭奪戰が展開された。一方は、自分が生んだのだから自分の子だといふ。他方は自分が育ててゐるのだから構はないでくれといふ。二人の母を持つた、わりかた不幸な幼年の日であつた。結局、私は母の愛情といふものを知らずに成人した。

長じて金鍾漢は、鏡城高等普通学校を卒業するが、この頃養父が死亡する。それから十年後には彼は生父をも失うが、『たらちねのうた』の「あとがき」には次のように書かれている。

私の父は四十の若さで他界したので、中学を出たばかりの私は、一家を管理しながら田舎に落着かねばならなかつた。さうした家庭の事情を押しきつて東上した私の気持には、たぶんに、なにか故園に無いものを希求してやまない熾烈さが手傳つてゐたやうである。藝術や科學は超國境的なものとされてゐた時代だつたから、さういふもののなかに心のふるさとを見つけやうとしたのであらう。

この辺りのことについては、一九三五年一月、『朝鮮日報』新春懸賞文芸に、民謡「**베짜는색시**」が入選した際の「作者略暑」に次のような記述がある。

本名は金鍾漢二十一、明川立石産。鏡城高普出、同姓同名の友人に恋人を奪われたので、関西[8]に満州にノスタルジアの切ない放浪をしていたが、現在は故郷の私立校に落着き生の再出発を計画している[9]。（筆者試訳。原文朝鮮語の場合、以下同じ）

そして金鍾漢のおそらく最も初期の作品をこの時期に見ることができる。鏡城高普在学中の一九三三年一月、『東光』誌上に詩「激流」が題名のみ掲載されている。また前記の『朝鮮日報』新春懸賞文芸入選作、さらにそれより十箇月前の一九三四年三月、『別乾坤』誌上「第一回新流行小曲大懸賞」に入選した「**임자업는나루배**（主のいない渡し舟）」と、同年同月『中央』誌に発表された「決算外一篇」と題する二篇がある。「主のいない渡し舟」には、「京城　乙巴素」の署名と、背広にネクタイ、ソフト帽を被り、ロイド眼鏡をかけパイプをくわえて、精一杯、大人びた服装をした童顔の写真が掲載されている。「京城」とあるのは、この頃が放浪の一時期に当たるのかもしれない。

2、習作時代

前記の作品は、「激流」のみ本名で、他はすべて「乙巴素（ウルパソ）」という筆名で発表されている。一九三九年九月に『文章』誌から鄭芝溶（チョンジヨン）の推奨を得て詩人として登壇するまでを習作時代と見做すと、この時期の作品の多くが「乙巴素」の名で発表されている。

乙巴素とは元来、高句麗故國川王の時の宰相の名で、百済の生忠とともに、彼の作とされる最古の時調一首が伝えられている（偽作ともいう）[10]。金鍾漢が號として彼の名を選んだということは、乙巴素に対して何か特別な愛着を抱いていたと思われる。習作時代に、詩人としてよりは民謡・流行歌作家として頭角を現していた鍾漢が、自らを当時の所謂「新民謡[11]」の旗手として、時調創始者と目された乙巴素になぞらえたと考えれば、そこからは彼の高い自矜の心が読みとれるだろう。

一九三四年に流行小曲で、次いで三五年に民謡で懸賞に当選した金鍾漢は、一九三六年一月、今度は『東亞日報』紙の新春懸賞文芸に民謡「望郷曲」（原題「松花江**밝은달**（あかるいつき）」）で一席入選する。「新春文藝當選者紹介」[12]には次のように書かれている。

一名。乙巴素。二十三歳。
咸北明川立石出生。鏡城高普卒業後西＊大学[13]中途退学。岸曙の知遇を得て詩歌修業に再び立志したという。好んで民謡を書き小曲を吟じる。現在は故郷の私立校に在職。不日、渡東予定。（試訳）

金鍾漢は、鏡城高普を卒業した後[14]、恋人を友人に奪われて平安道・満州を放浪していたとき、西＊大学[15]に通ったらしい。金億（號・岸曙）とどのように知り合ったのかは不明である。詩歌修業に「再び」立志したとあるのは、高普時代に始められていた作品活動が放浪によって一時中断されていたのであろう。

一九三六年には前記の「望郷曲」のほかに、筆者の知るかぎりでは、鍾漢の最初の評論である「民謡**를**（を）通**해본**（してみた）　吉州・明川」が、『朝鮮日報』に「夏期　學生通信」として八月七日から九日まで三回にわたって連載されている。これには「雩城學校　金鍾漢」という署名と、（七、二〇—明川富禾洞[16]**에서**（にて））という日付けと場所が記載されているので、彼が在職した故郷の私立校とは、この雩城学校を指すと考えてよいと思う[17]。

3、東京時代

一九三六年一月に「不日、渡東予定」であった金鍾漢が、同年七月二〇日までは在郷していたことが前記の記載からわかる。それから約一年半後の一九三八年一月、『東亞日報』新春懸賞文芸に再び民謡「明川**방아타령**（明川杵搗き節）」が佳作当選した際に記された住所は、（東京本郷湯島三組町一七鈴木方）となっており[18]、一九三六年の七月以降、遅くとも三七年中には渡日していたようである。

金鍾漢は日本大学専門部芸術科に在籍するが、専門部というのは、中学を四年まで修了していれば本科生として、三年まで修了している者でも別科生としてそこに入ることができた制度で、当時の私立大学には、このような三年制の専門部の設

けられているところがあった。金鍾漢は鏡城高普を卒業しているから、入学資格があったわけである。

鍾漢が在籍していた頃の芸術科は、本郷金助町にあり、文芸・演劇・映画・美術・音楽の五専攻に分かれていた。一九三九年四月に江古田（現在の日大芸術学部所在地）に移転した際、専門部芸術科は、創作科・演劇科・映画科・美術科・音楽科・商工美術科・写真科・宣伝芸術科の八科に増設された。[19] 鍾漢が何を専攻したのかは不明だが、鏡城高普の後輩で、第二詩集『隠花植物誌』の題字を鍾漢が書いてやったという咸允洙[20]が、一九四一年に創作科を卒業しており、おそらく鍾漢も文芸専攻であったと思われる。

一九三七年四月に入学、あるいは同年九月に編入学[21]した金鍾漢は、前年の一九三六年には民謡と評論を一篇ずつ、三七年には民謡二篇と評論一篇を発表している。二年間で五篇というのは、作品数が非常に少ない。なぜなら三五年には乙巴素の名で『朝鮮日報』に民謡を三篇、『朝鮮中央日報』『東亞日報』に詩を計七篇、『學燈』『朝鮮文壇』に詩を計三篇、全部で計十三篇[22]の作品を発表しているからである。また、作品内容にも変化がみられる。三八年を境として、同年に民謡三篇と流行歌一篇を発表以後、彼の作品から民謡・流行歌が姿を消してしまうのである。民謡・流行歌と並行して詩も書いていた彼が、三六年から三八年にかけて民謡・流行歌作家から詩人へと方向転換し、試行錯誤を繰り返していたのがこの時期ではないだろうか。この推測を裏付ける手掛かりとなるのが、「佐藤春夫先生へ」という、一九四二年『國民文學』四月號に掲載された書翰体の文章である。東京時代の金鍾漢について知ることのできる数少ない資料の内でも貴重な一文なので、繁を厭わず引用しておく。

佐藤先生―

はじめて私が先生をお訪ねしたのは、たしか昭和十三年の早春だつたと記憶してゐます。その冬の最後の雪がちらついてゐて、先生の住んでゐられる關口町一帯の屋敷町が、西洋のものの本で讀んだことのある古城のやうな氣がしました。

その頃の私は詩人にならうとする自分の才能に絶望して、本氣で歸農を考へていたものです。未錬と申しませうか。とにかく、歸農する前に一度、信頼の出来る先輩に自分の作品を見てもらひたかつたのです。それで、六七篇の詩を先生にお送りしたわけですが、「貴稿本日拝見、『スペイン風の戀歌』『對句』等の詩風も面白いが、『巨鍾』『冬眠』の本格的詩

情を敬愛し、朝鮮の古謡選の譯も見事なり。要之に皆おもしろく拜見、道はこのまゝでよろしい。一層御勉強、大形を期せらるべし。佐藤春夫」といふ先生のおハガキに接し、頭が混亂して三時間ばかりは茫然自失したのですが、徐々に嬉しくなつてきたとみえて、三日間に六七軒の喫茶店を遠征し、四日目の、雪のちらついてゐるその日、先生をお訪ねしたわけなんです。（中略）その日のことは、何も覺えてゐません。興奮してゐたからです。『文學をやらうとする朝鮮の青年にもずゐぶん會つたが、どうも意志が薄弱でいけないね』といふお言葉が、その日の収穫の全部であり、お土産でもあつたのです。下宿に歸ると、一時にぐつたりと疲れが出て、二日も學校を休み、萬年床にうごめいて詩人になる設計をしてゐたものです。

昭和十三（1938）年早春の佐藤春夫訪問の事実に呼応して、同年三月二九日に『朝鮮日報』主宰の流行歌懸賞募集に、「**알루**江處女（鴨緑江の娘）が一等当選した折の「當選者略歴」には、「鏡城高普を卒業して日大芸術科在学中。佐藤春夫に師事して（六字空白）詩を書く」（試訳）と記されている。

そして先の引用文中の「その頃の私は詩人にならうとする自分の才能に絶望して」いたという時期が、目立って作品発表数の少なくなった三六年から三七年、特に三七年九月『詩建設』第二號に「白頭山打鈴　伐木歌」を発表してから、三八年一月に「明川杵搗き節」が、三月に前記の流行歌が当選するまでの約半年間に相当するのではないかと思われる。

実際、民謡・流行歌作家としては、弱冠二十歳（数え年で二一歳）で、流行小曲が当選し、その後も数々の懸賞で華々しい当選を繰り返した彼ではあるが、同時期に発表された詩の方はと言えば、後に『文章』推薦欄に入選する「**그늘**（かげ）」、また『たらちねのうた』に収められるいくつかの作品の原型や萌芽を孕んでいるとはいえ、概して稚拙で習作の域を出ないものがほとんどである。しかし三八年を境として作風は一変する。彼の代表作の一つ「**낡은우물이있는**風景（古井戸のある風景）」はこの年に発表されている。そして前述のように、民謡・流行歌は姿を消し、一九三九年四月、六月、八月と『文章』推薦詩の推薦三回を完了して九月、『文章はここに二人の若い詩人を天下に紹介する』（抜粋試訳）という「**두**[2]新人**의뒤에서**（うしろから）」と題する一文とともに、「**나의**（わたしの）作詩設計圖」をひっさげて詩壇に登場して以後、四四年九月に急逝するまでに、多数の詩を発表するのである。

この転機は、明らかに三八年早春の佐藤春夫訪問（書翰往来を含む）によって訪れたものであろう。鍾漢が佐藤春夫をいかに敬愛していたかは、先に引用した書面からも窺われるが、鍾漢の後輩にあたる柳呈（ユジョン）は、彼が目にした佐藤春夫と鍾漢との師弟関係を次のように描いている。

日本の詩人としては、佐藤春夫が最も詩の真髄を知っている人間だが、佐藤はほとんど「思無邪」の境地に至ったと思うがどうだろうか、と、唾が乾くほど誉めるのだった。後日、彼に従って佐藤氏を訪問したとき、鍾漢は「先生」と佐藤氏を心から尊敬する態度であり、佐藤氏もまた鍾漢を敬愛する口ぶりであった。[23]（試訳）

金鍾漢は一九三九年三月に日大芸術科を中退[24]し、同年春頃から「婦人畫報」社に勤務するようになる。日大時代に鍾漢がどのような学生生活を送ったかについては、一九三八年一二月二六日の『朝鮮日報』に掲載された「卒業을압둔（をまえにした）藝術의（の）殿堂에서（にて）」という一文からわずかに窺い知ることができるが、『たらちねのうた』の「あとがき」にも、「美學や美術史の本ばかり讀みながら、博物館に行くことを日課にしてゐた、東京での一時代[25]」のことが次のように記されている。「さて、東京での私は、めつたに講義に出ない大學生だつたり、さる婦人雑誌の記者だつたりした。鈴木三重吉の初期の短篇と、琉球の民藝と、湯島天神の鳩とが好きであつた。戰争になつてからはさういふ小粒な趣味はふつとばされてしまつたが、いまでも惡いことをしたとは考えてゐない。モダニズムの爛熟期で、どろくさい朝鮮語の詩を書いては愉しんでゐたものである」。また、鍾漢は創作科の機関誌『藝術科』[26]に投稿しているが[27]、鍾漢が文芸部員として同誌の編集に関わったのかどうかは不明である。

さて、婦人画報社に入社した頃のことを、鍾漢は「佐藤春夫先生へ」の中で、先に引用した文章に続けて次のように書き記している。

佐藤先生―

それから一年後、私はある婦人雑誌に勤めるやうになりました。編輯長[28]が非常にヒラケタ人で、最別（ママ）から『金さん、う

ちの雑誌はモオドだけではいけなくなつてきたから、ひとつ、あンたの創意で學藝欄を始めてみてくれませんか』といふことになり、さつそく私は、先生をお訪ねして原稿をお願ひしたものでした。無理もなかつたのです。雑誌記者になつた若い弟子が、自分のプランで師匠のところへ原稿を頼みに行くほど嬉しい日が、またとあるものでせうか。

ところが、その日ほどキビシイ先生に接したこともなかつたやうな氣がします。(後略)

当時の婦人画報の紙面をたどると、鍾漢が学芸欄を担当するようになったのは一九三九年六月號からと思われる。同號から割付がそれ以前のものと比べて顕著な変化を見せ豪華になり、また同號同欄には「芸術の頁について」と題する宣伝紹介文が(K記者)の署名入りで掲載されている。

七月號の同欄には、扉に佐藤春夫の詩「遠い花火」を迎え、『初夏の詩』と題して三好達治、田中冬二、丸山薫等が名を連ねている。また、この號から「New Book Review」「讀書室」等と題された読書案内が断続的に掲載され、そのうちのいくつかは鍾漢が担当していることが署名から明らかなので、彼の読書傾向を知るうえで非常に興味深い。署名はなくとも、文体からそれと分かるものもいくつかある。

そして八月號には、「傳説行脚」と題して、中村地平・東郷青兒・福田清人と共に「朝鮮の傳説　露領の見える街　金鍾漢」が掲載されている。これは婦人画報記者時代に同誌に彼が実名[29]で発表した唯一の作品である。[30]さらに同號には、「K記者」の名で「讀書室」と、「詩人が語った「新しさ」について」という評論も掲載されており、学芸欄はほとんど鍾漢の独壇場といった感がある。しかし、九月號以降はこのような状態は影を潜め、一九四〇年七月號の「讀書室」で、中村正利著『太平洋風土記』の書評に(K)という署名が見えるのみであり、本来裏方である筈の「K記者」が誌面を賑わすことはなくなってしまった。

ところで、鍾漢がどういうきっかけで婦人画報社に勤務することになったのか、またいつまで同社に在職したのかも不明である。ただ、一九四三年一二月號の『朝光』に掲載された随筆「朝鮮のこころ」には、「(前略)桑澤君と私は、東京のある雑誌社で3年も机を並べて働いたことのある、いはゆる莫逆の仲なのである」と書かれているので、三九年春から四一年まで在勤したと思われる。『たらちねのうた』の「あとがき」には、「そして、戰爭になつた。いろいろと、私もすこしは考

える青年になつてゐた。私は故園に歸つた」とあり、四一年一二月、遅くとも四二年二月までには朝鮮に戻った[31]と考えられる。

一九三八年から四〇年にかけての三年間は、詩に評論に、鍾漢の才能が開花した第一の時期である。第二の開花期は、四二年二月『國民文學』の編集に携わるようになってから、四三年六月、七月號を最後に同誌を離れて客員となり、翌七月の第一詩集『たらちねのうた』、第二詩集『雪白集』の刊行を経て同年末に至るまでの約二年間である。この二つの時期を結ぶ四一年頃のことについては、前記の「佐藤春夫先生へ」の中で次のように記されている。

佐藤先生―

去年の秋のことです。S房から、詩書のシリイズとして『朝鮮詩集』と出(ママ)してみないかと言はれ、私は先生のところへ相談に行きました。心細かつたからです。

『先生、私にそんなことが出來るせうか』

小さい沈黙があつてから、

『ぼくは今まで君の仕事を見てきたのであるが、背水の陣をしいてやれば出來ないことはないと思うね』

戰爭といふものを始めて(ママ)體驗し、まだ革新するまでには至らなかつたその頃の私は、二回目の絶望に見舞われて苦んで(ママ)ゐた時なので、背水の陣をしいてやれと云われたお言葉で救はれたやうな氣がしました。(中略)

その後、都合あつて『朝鮮詩集』のことは流れになり、私も對時代的な悩みから職場をかへてみたり、内鮮文化の交流に資するやうな雜誌の企劃を立てて失敗してみたりしたのですが、そして、詩人になるよりも先に人間にならねばならぬと思ふやうになつたのですが、それから以後のお話は『私』ではなく『私たち』の名に依つてお話申上げます。それほど今の朝鮮には若い『私たち』のやるべき仕事が多いからです。

鍾漢が「戰爭といふものを始めて(ママ)體驗し、まだ革新するまでには至らなかつたその頃の私は、二回目の絶望に見舞はれて苦んで(ママ)ゐた」と書いたとき、そこには、「詩人にならうとする自分の才能に絶望して、本氣で歸農を考へていた」という一

度目の絶望とは異なる種類の苦悩を見出すことができる。

鍾漢が東京にいた日中戦争勃発から太平洋戦争開戦までの時期に、朝鮮半島では、三六年八月に朝鮮総督に就任した南次郎によって「内鮮一体」が提唱され、朝鮮人に対する同化政策が著しく強化された。この「内鮮一体」については、宮田節子氏の論文「皇民化政策と民族抵抗—朝鮮における徴兵制度の展開を通して—」及び「内鮮一体の構造—日中戦下における朝鮮支配政策の一考察—」[32]等に詳しいので、これらの論考を参考にしながら、「内鮮一体」についてここで若干記しておきたい。

「内鮮一体」とは、提唱者である朝鮮総督南次郎の定義によれば、一言でいって、「半島人ヲシテ忠良ナル皇国臣民タラシムル」[33]ことである。朝鮮半島を大陸侵出への兵站基地とし、従来の資源・食料供給地としてのみならず、朝鮮人を労働力、特に戦力として駆り出すために、すなわち〝天皇の赤子〟として無条件に国に命を捧げる〝皇軍兵士〟に仕立てるために、「凡ソ物ヲ制セントセバ、先ヅ心ヲ治メ」[34]るべく、日本人的情操を強制的に植え付け、培養しようとしたのが皇民化政策であり、そのためのスローガンが「内鮮一体」であった。

「皇國臣民ノ誓詞」の口誦・雑誌掲載義務、宮城（皇居）遙拝、神社参拝の強制、日本式氏名、所謂「創氏改名」の強要、中学校・小学校での朝鮮語学習の随意科目化・廃止、民族主義・共産主義運動封じ込めのための朝鮮思想犯保護観察令、朝鮮思想犯予防拘禁令の公布・施行、陸軍特別志願兵制実地、国家総動員法の朝鮮適用、等々と並んで国語普及運動が励行され、これが四二年六月朝鮮総督に就任した小磯国昭の代になると、「喧嘩や寝言も国語でするやう」[35]な「国語常用」の徹底、思考様式はおろか生活様式までも日本人化するための多様かつ広範な皇民化運動による「修養」「錬成」が展開され、朝鮮人の苦痛を増大させたのであった。

したがって、「まだ革新するまでには至らなかったその頃の私」と金鍾漢が書いた「革新」とは、朝鮮人が皇国臣民になること、あるいはなろうと決意することを意味した。支配者側は朝鮮人側の自発性を喚起するために、当初「内鮮一体」をあたかも「内鮮平等」であるかのごとく宣伝したが、朝鮮人を差別することで精神的優位・物質的利益を享受していた日本人が自らそれを手放すはずがなかった。〝日本人であること〟があらゆる優越の根拠であり、支配者〝たるべき〟日本人の優秀性は、「万世一系ノ天皇」を保持する一貫性、歴史性なるものに依拠していた。支配者側は、「朝鮮人には全く一方的に

完全なる「皇民化」を強要しつつ、しかし朝鮮人はあくまでも異民族であるという「厳然タル事実」に立脚[36]していたために、朝鮮人がいかに日本人らしく振るまおうと、却って疑心暗鬼をつのらせ、そのため皇民化政策は極端に押し進められていった。朝鮮人にとっては、母語や姓名といった根源的な民族性を剝奪され皇民化を強制される苦痛と、「革新」したところで今度は「皇民化の度合」を無限に疑われる苦悩と、二重の苦しみを強いられたことになる。

4、『國民文學』編集者として

金鍾漢は『國民文學』四二年一月號に、日本語詩「園丁」を、同誌三月號に評論「一枝의(の)倫理」を発表し、それが縁で同誌三月號、すなわち同年二月頃から、『國民文學』の編集に携わるようになる。[37]

一九四〇年八月には、朝鮮人の民族意識の砦であった二大新聞『東亜日報』『朝鮮日報』が廃刊され、朝鮮語の新聞は御用新聞の『毎日新報』を残すのみとなり、解放以前の朝鮮文学の最高水準を築いた文芸雑誌『文章』も四一年四月に廃刊された。『文章』と並んで同時期の朝鮮文学を担った『人文評論』も、『文章』の廃刊に伴い休刊状態が続いていたが、『人文評論』主幹の崔載瑞(チェジェソ)によって同年十一月に創刊されたのが『國民文學』であった。統合の結果、朝鮮半島に唯一残された文芸雑誌であった。この雑誌の成立事情については、崔載瑞自身が「朝鮮文學の現段階」(『國民文學』四二・八)に詳細に記している。

> 四月に入ると朝鮮文壇は新しい問題にぶつ付からねばならなかつた。それは諺文文藝雑誌統合の問題である。(中略)主動は警務當局で、當面の理由は云ふまでもなく用紙節約にあつたが、當局としてはこの際雑誌統制に依り朝鮮文壇の革新を一氣に解決したい意圖を有してゐられたであらうことは容易に推測され得るであらう。その結果生まれ出たものが今日の「國民文學」である。(中略)さて、屢次の折衝の結果、當局との間に取極められた「國民文學」編輯要項は次の如きものであつた。
>
> (一) 國體觀念の明徴(略)
>
> (二) 國民意識の昂揚　朝鮮文化人全體が常に國民意識を以て物事を考へ且つ書くやう誘導す。特に盛上がる國民的情熱をその主題に取入れるやう留意す。

（三）　國民士氣の振興（略）
（四）　國策への協力　從来の不徹底なる態度を一擲し積極的に時艱克服に挺身す。特に當局の樹立せる文化政策に對しては全面的に支持協力し、それが個々の作品を通じて具體化するよう努む。
（五）　指導的文化理論の樹立（略）
（六）　内鮮文化の綜合　内鮮一體の實質的内容たるべき内鮮文化の綜合と新文化の創造に向かつてあらゆる知能を綜動員す。
（七）　國民文化の建設（略）

これで「國民文學」の性格は大體想像が付くと思ふ。

それでは、〈国民文学〉とはいかなる文学理念なのだろうか。『國民文學』主幹の崔載瑞は座談会「詩壇の根本問題」（『國民文學』四三・二）で次のように端的に発言している。「朝鮮文學は日本の國民文學の一翼として國語で書く、然しそれは依然として朝鮮文學である。半島人が書こうが内地人が書こうが、とにく朝鮮の生活とその問題を取扱って、こんにち日本の生きて行く道を歩む、それが國民文學としての朝鮮文學の在り方である」。のみならず「朝鮮文學の現段階」において、彼は朝鮮文学の独自性を主張し、朝鮮文学が日本文学の一環として再編制されようとも、それに依りむしろ日本文学の側の変革を企図したのであった。[38]

朝鮮で〈国民文学〉の論議が盛んになった背景には、その一年ほど前に日本内地で流行した国民文学論の影響もあるかもしれないが、朝鮮人作家たちにとっての内的な理由は、「戰爭が起るまではやはり暗暗裡に民族主義、ぢやないけれども、ともかく、さういつた見えない氣持ちがまだ充分清算し切れずに居つたし、それがこんどの戰爭でどうしてもこれをはつきり清算しなければならぬといふ處に立至つた」[39]ことであったろう。外的な理由はむろん当局の統制であり、先に引用した「編輯要項」は、『國民文學』誌が唯一の文芸雑誌となったために、当局が朝鮮文学全体に対して突きつけた課題であると言ってよかった。

金鍾漢は『國民文學』編集者として、崔載瑞とともに座談会の進行役や、編集後記を担当するようになるが、このことは、

鍾漢が主幹の崔載瑞に次いで、編集部内で重要な職務を担ったことを示すだろう。鍾漢をモデルにした鄭飛石（チョンビソク）の小説「落花の賦」（『國民文學』四五・一）には、次のような回想場面が登場する。

（前略）私がまだ文學に未練をもつて某雜誌の編輯に携つてゐた或る日のこと、編輯長が縁の太い眼鏡をかけた一人の青年をつれてきて、これは今度新しく入社した人だといつて彼を同人に紹介したのであつた。その青年は目が異様に鋭く、眉骨が目を蔽ふやうに險しく出つ張り、頰の肉がぶくぶく膨れ上つて、見たところどことなしに陰險な印象を與へる男で、物を言ふ時に分厚い唇が痙攣でもするかのやうにぴり〳〵震えるのが一癖ありさうであつた。（中略）彼は容易に同人たちと打ち解けようとせず、たゞ私にだけは始終親しみをもつて自分からすすんで話かけてくれたりしたのだが私にも彼は必ず丁寧な言葉を使つたのである。それ故彼は仲間から異端者視されたが彼がそんなことを氣にかけるやうな氣配はいつかう見えなかつた。それはそれとして編輯者としての彼の腕の冴えは驚歎に値するものがあつた。こみ入つた割付などで私が途方にくれてゐると彼は見るに見兼ねたのであらう。つかつかと私の傍までやつてきて、かうやつて見たらどうですかといつてさつさつと自分で割付（ママ）て見せてくれるのであるが、それがなかなか素人ばなれのした、堂に入つた編輯ぶりであつたのである。そんな譯で編輯室における彼の重量は日増に加つていくので、（後略）

また、李石薫（イソクフン）は、追悼文「金鍾漢の人及作品」（『國民文學』四四・一一）に次のように記している。

金ぶちではないが、それに近い感じのいくらかしやれた眼鏡をかけた、赤黒い色のがむしやらな、如何にも北鮮人らしい精力的なまる顔が、餘りいい印象は與へなかつたけれども、圖太い性格を象徴するかの様な低くて重みのある太い地聲と、よく上機嫌さうにゲラゲラと笑ふ屈托（ママ）なささうな若さが、私には好感が持てた。

丁度その自分、われわれは國民文學といふものを眞劍に考へ始めてゐた當初だつたので、彼の如き國語に堪能な、才能のある詩人が、われわれに『味方』乃至『同人』として歡迎されたのは必然の情勢であつた。京城に乘込んだ早々、金鍾漢は少し位い氣をよくしたかも知れない。氣をよくして圖に乘つたせいだつたか、或は、全く本來の性格の所以であつた

かは知らないけれども、それから間もなく彼は方方で衝突し、摩擦を起して、せまい京城文壇の話題になつた。何かのことで毎日新報の學藝部へ抗議に行つたり、城山昌樹らの若い詩人達を罵倒して、彼等の間に『金鍾漢が一體何んだ。』といつた様な非難が持ち上がつたりした。（中略）人一倍自信の強い彼として、先輩の矜持と自尊心があつたのであらう。

とに角、こんなこと等から『第二の金××』（金文輯のことと思われる。三〇年代末、奇矯な言辞を弄して物議をかもした評論家－筆者注）といつた様な別名を奉られ、文壇仲間から敬遠されたときもあつたりした。（中略）金鍾漢はおべつかのいへない愚直な人間であつた。地金そのまゝに生きようとした素朴な人間であつた。私は彼の十の缺點よりも、一つのこの長所を買ひ、それを愛した。

このような性格が災いしてか、鍾漢は一年四箇月あまり勤めただけで、四三年七月號を最後に『國民文學』を離れ客員となる。同號の編集後記には「一身上の都合で」とあるが、鍾漢自身の言によれば「馘になつ」[40]たものらしい。

5、『國民文學』以後

『國民文學』を離れた金鍾漢は、翌月四三年七月五日に第一詩集『たらちねのうた』を、同月二十日には第二詩集（訳詩集）『雪白集』を、金鐘漢の名で刊行する。鐘漢というのは四三年以後鍾漢が多用した筆名である。[41] また鍾漢の創氏名「月田茂」は、彼の故郷の家の呼び名「タルバッチブ」に由来するらしい。[42] 鍾漢が作品を創氏名で発表したのは、書評二篇、評論二篇の計四篇のみである。[43]

鍾漢は『たらちねのうた』を東京の文学者たちにもかなり送ったらしく、横光利一が『毎日新聞』で賞め、中野重治も賞賛の手紙を寄せているのを、今日彼らの全集でそれぞれ確認することができる。[44]

その後、鍾漢は『毎日新報』社発行の日本語週刊誌の記者を勤める傍ら、[45]『新時代』『春秋』『朝光』等に詩や評論を発表していたが、一九四四年九月二十七日朝、急性肺炎により、三十歳で夭折したのだった。

次章では鍾漢の作品を具体的に検討する。

三　作品

金鍾漢の作品は、大きく三種類に分けることができる。すなわち、（一）民謡・流行歌、（二）詩、（三）翻訳、であり、この区分に入りきれないものとして掌篇小説[46]が一篇ある。鍾漢の著作としてはこの他に多数の評論と随筆があり、また『婦人畫報』で読書案内を、『國民文學』で編集後記をいくつか担当している。しかし筆者はこれらを「作品」とは区別して取扱い、本章では、冒頭で分類した三種類について、順次整理してみたい。

1、民謡・流行歌

金鍾漢の最も初期の作品は、筆者の知り得たかぎりでは、一九三三年一月『東光』誌上に学生文壇佳作として題名のみ掲載された詩「激流」である。また、三四年には『別乾坤』三月號誌上に「第一回新流行小曲大懸賞」当選作として発表された「**임자업는나루배**（主のいない渡し舟）」と、同年同月『中央』三月號の「中央詩壇」に発表された「決算外一篇」と題する二篇の詩、及び『別乾坤』五月號（第九巻第四號）の「新流行小曲第二回當選發表」に佳作として題名のみ挙げられた「**쌀내하는색시**（洗濯むすめ）」がある。

金鍾漢は、一九三五年には三篇の民謡を、三六年には民謡を一篇、三七年には二篇、三八年に三篇の民謡と一篇の流行歌を発表している。使用言語はすべて朝鮮語である。三九年以降には、前章で述べたように、民謡・流行歌は発表していない。金鍾漢の作品に特徴的なことは、同一の詩題・詩趣のもとに書かれたもの、というよりは同一作品が若干の語句修正、題名の変更、または改作された形で何度も発表されるということであるが、民謡・流行歌においても次に挙げるような類似関係が認められる。

「**알루강구비구비**（鴨緑江うねうね）」（『朝鮮日報』一九三五、二、八）
「**알루**江處女（鴨緑江の娘）」（『朝鮮日報』流行歌募集当選　一九三八、三、二九）
及び、

「빨내하는색시（洗濯むすめ）」（『別乾坤』第二回新流行小曲大懸賞佳作　一九三四・四）
「마전타령（晒し節）」（『東亞日報』三七、七、三）
「빨래질（お洗濯）」（『女性』三八・十）

「洗濯むすめ」は、前述のとおり作品自体は掲載されていない為、内容はわからないが、題名から考えておそらく「晒し節」「お洗濯」の原型であると推測される。両作品群においてそれぞれ、題名・形式（節・行数）・表記法・語句の修正が見られるが、改作と呼びうる変更はなされていない。

「鴨緑江うねうね」「鴨緑江の娘」は、鴨緑江を下って新義州に行った恋人との離別を悲しむ娘の心をうたったもの、「晒し節」「お洗濯」は、洗濯しながらもどかしい恋情も洗い流したい女心をうたったものである。

全作品を発表年順に挙げると、「主のいない渡し舟」は、波間を漂う小舟に漂白のわが身をなぞらえて過ぎし日を夢みる心をうたったもの、「남어지이한밤（残りこの一夜）」（『朝鮮日報』一九三五、一、二七）は、嫁ぐ前夜の娘の心境をうたったもの、また「明川방아터령（明川杵搗き節）」（『東亞日報』三八、一、一二）は、女たちが杵を搗くリズムに合わせて雑感（特に恋情）を吐露したもの、「海峡의달（海峡の月）」（『朝鮮日報』三八、四、二五）は、関釜連絡船から離郷の悲しみをうたったものである。「白頭山打鈴　伐木歌」（『詩建設』二號、三七・九）については未見である。

「베짜는색시（機織りむすめ）」（『朝鮮日報』新春懸賞文芸当選　三五、一、一二）及び「望郷曲」（原題「松花江밝은달（あかるいつき）」『東亞日報』新春懸賞文芸一席入選　三六、一、四）については、「民謡를（を）通해본（してみた）」吉州・明川」（『朝鮮日報』三六、八、七～九　夏期學生通信、三回連載）の中で鍾漢自身の解説がある。「機織りむすめ」は、離別した恋人に逢いたくてもそれが叶わぬ切ない思いを抱いて一心に機を織るむすめをうたったものであるが、では、機織りむすめたちを泣かせる男たちは、何の為に何処に行ってしまったのか。鍾漢は次のように言う。

昔からこの地方の青年たちは、空想と放浪性に富む。東江（露領沿海州）に、西江（間島）に、蜜月の甘い夢もぼろ靴のようにうち捨てて逃げる青年たちが非常に多かった。彼らは大概、一攫千金を夢見て、あたら機織りむすめたちの青春を

独宿空房に朽ちさせたのだ―社会機構が変化した昨今では、やむをえない移民も相当多いが、意中の「機織りむすめ」を残して後ろ髪引かれる思いで離郷する若者たちは、どれほど多いことだろうか。（試訳）

このような男達の、遠く離れた松花江の明月に故郷を慕う心情をうたったのが、「望郷曲」であった。形式的には金鍾漢の民謡・流行歌は、「明川杵搗き節」を除いてすべて三・四・五調で、一節は三行乃至四行[47]である。「望郷曲」が当選した際の「新春懸賞文藝選後感　七」（『東亞日報』三六、一、一一）に、

民謡は近頃レコードでよく見る所謂新民謡体というものの試作が多数あった。大部分七五調で、朝鮮民謡としての正体を保つことのできないものであった。四四調はほとんど見ることができなかったのは物寂しいことであった。（試訳）

とあることから、鍾漢の新民謡は在来の朝鮮民謡の形式を留めたものだと言えよう。内容的には、前述したように、出稼ぎもしくは移民として流れてゆく、そうして他郷で暮らす男が故郷を慕う心情をうたったもの、またはその男を慕う女の恋情をうたったものが圧倒的に多い。そして後者には、概嘆を概嘆のまま言葉でなぞり、行間の意に乏しい、凡庸な表現が目立つ。また、このような主題は、当時巷に流布した流行歌、すなわち、一九三四年に「万人愛唱の大ヒット曲」となった『他郷ぐらし』（金陵人詞・孫牧人曲）[48]や、「別れの日を前にして、こみあげる情を胸に、ただ男の成功して帰る日を祈って待つ女心をうたっ」て三五年に大ヒットした『アプカンムル（鴨緑江）流れて』（金陵人詞・文湖月曲）[49]等と同じものである。

それでは、鍾漢は在来民謡に対して新民謡をどのように位置付けていたのだろうか。評論「新民謡의精神과形態[50]」において、彼は次のように述べている。

新民謡は新民謡以前のあらゆる伝統的民謡から出発するべき何等の義務もない。新民謡は土民民謡が終焉する所から新しく出芽する（あるいは、した）民謡形式であるのだ。新民謡は新しい朝鮮の感情と言語を生かしてくれる民謡作家を待

つばかりである。[51]

私は民謡を象牙塔の中に求めることを嫌う。街頭の流行歌や『ジャズ・ソング』の中から収拾しようと思う。農村中心の中世的社会ではない、今日の都市中心の社会では、民謡の温床は不可避的に都市の街頭でなければならないのである。[52]（試訳）

これに対して、金思燁が「藝術民謡存在論　그時代性과土着性에關하야」を発表して反駁を試みている。[53]すなわち、

（前略）民謡創作と流行歌創作とは、その精神や形態において根本的に大きな違いがある。（中略）中央都市の各レコード会社では、商業政策から日本内地のそれを模倣して、民謡に対する深い理解もない詩人たちの、安っぽい自己詠嘆に終始した詩を民謡の音楽的慣用法を無視して作曲し、新民謡という「レッテル」を貼って販売市場に送り出したところで、（中略）この現象が新民謡の発生を意味するのではない。

今は旧民謡と新民謡との過渡期にあるが、将来あるべき芸術民謡は、在来民謡に対する深い認識を把握して、その中に根拠を置いて出発すべきなのである。

この根本概念を無視して、昨今盛況な流行歌の現象を以て新民謡のそれと論じた乙巴素の観点は、もっと正しい角度に向かって再認識しないかぎり、彼の論を逐次検討したところで徒労に終わるだろう。[54]（試訳）

「農村中心の中世的社会の生産的芸術」である在来民謡に対して、新民謡を「都市中心の非郷土的現代社会機構の消費的芸術」として位置付けたとはいえ、その〈都市〉や〈現代社会〉を類型的にしか把握していないために、鍾漢の民謡・流行歌は、形式的には在来民謡、内容的には流行歌の二番煎じ、という中途半端なものであった。民謡と流行歌とをジャンルとして区別せず、流行歌とは伝播状態を指すのであって、流行歌の中に俗謡も歌謡も民謡も小曲もある、と考えていたせいもあるだろう。金思燁の批判を受けた「新民謡の精神と形態」執筆以後発表された六篇の民謡（流行歌も含む）のうち、三篇

が前作の焼き直しであり、結果としてそのまま詩人へと移行していった事実を見ても、金思燁が指摘した問題を、鍾漢はついに打開できなかったのではないかと思われる。

2、詩

金鍾漢の詩は、その内容からおおよそ次に挙げるような五種類の傾向に分類できる。

- 故郷・家族をうたったもの
- 個人的感傷をうたったもの
- 朝鮮の風土・風物に取材したもの
- 時局に取材したもの
- その他

次に使用言語であるが、四二年一月『國民文學』に日本語詩「園丁」を発表する以前と以後とで、朝鮮語詩と日本語詩の比率が対照的に変化している。三四年三月から四二年一月までは、日大『藝術科』に発表された三篇のみ日本語で他はすべて朝鮮語であるが、「園丁」から四四年十一月の「急性肺炎（遺作）」に至っては、『毎日新報』に発表された「春服」（四二、三、一六）、「朝陽映發」（四三、一、九）、「**님의부르심을받들고서**（君のお召しを受けて）」（四三、八、六）、の三篇のみ朝鮮語で他はすべて日本語である。

さて、金鍾漢は、一九三九年九月に『文章』から登壇する以前に、三四年に二篇、三五年に十篇、三八年に五篇の詩を発表している。前章で述べたように、殆どが習作に過ぎないが、その中の一篇「『詩』午後**세시**（一三時）」（朝鮮中央日報』三五、一〇、一七）は、「**그늘**（かげ）」と改題されて『學燈』と『朝鮮文壇』（いずれも三五・一二）に掲載、後に改作されて三九年六月、『文章』の推薦欄に、四月の「歸路」に続いて入選を果たした「**그늘**」として結実する。

（試訳）『詩』午後3時

樹の葉あいには『海』があります。いつのまに風がそよぎ……潮騒……満ち潮……

午後3時
七月の影は『ベンチ』に時たま思い出したように柔らかな息を吹きかけます。
仏蘭西語では－『海』には母がいます。
だから、潮騒ではなくて母さんの子守唄が　影の『ベンチ』を寝かしつけるのでしょう。

（試訳）かげ

影が網をかけました
白いベンチの上に
白いあなたのドレスに

網のなかで
魚の習性を呼吸する
あなたの休息

……忘れてしまったのに
風が故郷の言葉で
葉あいをそよがせたら……

見えない手が
（おお　誰の手なのか）
網目を揺らします　揺らします

両者を比較すると、初期の詩に目立った散文的冗長さが後者では消え、心理的、技巧的になったと言えるだろう。しかし

李石薫が、「多くの現代詩が言葉の遊戯に堕して、何等の感動もなければ、作者の體臭もないといつた類であるが、しかし金鍾漢の詩にはモダニズムの影がさしてはゐるけれども、かなりの體臭があつた。これは彼が強い個性の持主であり、また農村育ちで、田園の素朴さを身につけてゐたせいであらう。（中略）現代詩も、彼を詩壇に出した鄭芝溶ばりの技巧の凝つた感覚派流の作品よりは、田舎臭い民謡詞（ママ）のものに、彼らしい佳品があつたやうに思つてゐる」[55]と評したように、鍾漢の詩には、朝鮮の農村風物を叙情的にうたったものが多い。「かげ」とともに入選した「故園의（の）詩」を訳出してみよう。[56]

（試訳）　故園の詩

夜は村を呑みこんでしまったのに
蛙の鳴き声は夜を呑みこんでしまったのに
ひとつ　ふたつ……灯は蛙の鳴き声のなかにぶらさがる

やがて酔っぱらいの満月がふらふらでてきて
銀いろの風景を吐く。

そして、「かげ」に見られるような、鄭芝溶の影響と思われる感覚的な手法で朝鮮の風物を詩に固定したのが、「歸路」や鍾漢の代表作の一つである「古井戸のある風景」といった絵画的な作品である。次は鍾漢自身の日本語訳である。[57]

歸　路

默々とあるいてゐる影です
默々とあるいてゐる牛です
默々とあるいてゐる男です
—なぜ　黄昏の影は長いのでせう

男は牛をたよりに
牛は影をたよりに
影は徑をたよりに

—アンジエラスの鐘はきこえないが
徑は影をひいて行きます
影は牛をひいて行きます
牛が男をひいて行きます

古井戸のある風景

しだれ柳はおいぼれてゐて
井戸のそこには　くつきりと
碧空のかけらが落ちてゐて　閏(うるふ)四月

おねえさま
ことしも　郭公(ポクキ)が鳴いてゐますね
つつましいあなたは　答へないで
夕顔(パコチ)のやうにほほゑみながら
つるべをあふれる　碧空をくみあげる
つるべをあふれる　傳説をくみあげる

徑は麥畑のなかを折れて　庭さきに
杏も咲いてゐる　あれはぼくらの家
まどろみながら　牛が雲を反芻してゐる
ほら　水甕にも　おねえさま
碧空があふれてゐる

これらの詩は美しくはあるが、読む者の胸に響くような、琴線に触れるような性質を持つものではない。「歸路」に対して鄭芝溶は手厳しい評価を下している。

君が発表した詩を見たのは一、二度ではないけれども、そのつどできがよく、そのつど心を動かされはしなかった。この軽快なコダック［手軽でこぎれいにとれるカメラ］趣味は結局のところ詩の美術的小部分にすぎない。しかし日頃つたなくて救いようのない詩ばかり見ているものだから、このように明暗が的確な絵画にであうと心はずむ思いがする。早く学業をおえて、深みと悲しみのそなわらんことを（大村益夫訳[58]）

だが、推薦完了となる三度目の入選を果たした「**할아버지**（祖父）」と「系圖」の選評では、鄭芝溶は次のように述べている。

（前略）君の詩は率直で明快で単純なので自ずと平明な用語と直裁なセンテンスと飄逸なスタイルを持つようになった。悲哀を機智で包みこむ技術もよい．なまなかのことでは他人の毀誉と批評に焦らずに済むだけの一如な個性を見ることができるのもよろしい。（試訳[59]）

東京時代の鍾漢には、故郷や家族や幼年の日への郷愁をうたった詩が多い。四〇年二月『文章』に発表された「連峯霽雪」は、鍾漢の資質と感覚的な技巧とが感情の沈潜を媒介として結晶した秀作であると言えよう。

連峯霽雪

地圖の靜脈のやうに　電線が
白い山なみを越えてゆきます
それとなく待つてゐるのですが　處女雪わけて
郵便配達はなかなかやつて來ない
つつおとが鳴り　谷あひが鳴り
村はそつと寢がへりをうつ
ふるさとではない　それは
みやこの壁に見る額縁のなかの風景
村は永遠に冬寵り
郵便配達は永遠にやつて來ない
はろかに波うつてゐる白い山なみを
電線は永遠に越えてゆきます

これは、『春秋』（四四・三）に掲載された鍾漢自身の日本語訳である。「連峯霽雪」の原型は、三九年十月『詩建設』第七輯に掲載された「雪景」という四行しかない短いものであって、全文はこうである。「陳腐な神話を反芻して／北方は積雪の下で冬眠します／ただ電線だけが村村を／連絡する地図の靜脈でありました」（試訳）

両者を比べると、「連峯霽雪」では鍾漢の抒情が深化したことがわかるだろう。また、鍾漢の巧みな日本語によって、原詩の雰囲気は訳詩にほぼ写し取られているけれども、原詩は一行が三語乃至四語、一節は二行で七語、最終節のみ八語、と整った形式をそなえ、その「３４　４３　４３　３４……」というなだらかなリズムが雪の稜線を、また端正で簡潔な文体が静寂と悲哀とを、効果的に表現し得ている。

続いて発表された「泊」（『朝光』四〇・四）、「돌（石）」（『同上』同年・五）も孤独を形象化した作品である。「はろかに私の内部で／暮れてゆく　未知の雪線を踏んで／つつましい　下女の足音だけが／暫し　遠ざかってゆく」（試訳）「泊」最終聯）のような内面の凝視、また「石」において、寝そべっている自己を「石のよう」だと対象化し、客観視する眼は、従前の作品には見られなかったものであり、このような視点は省察から生まれたものだと言えよう。

独り放り出された自己を認識する眼は、自分が放り出されている場所へ、時代へと向かう。日中戦争は長期化し、内地では非常時の「新体制」が国民に無関心と消極を許さなくなっていた。しかし朝鮮人はなにも好きこのんで日本国民になっていたわけではない。当時の朝鮮人の流言蜚語に現れたように、日中戦争は「何方が勝っても我々には関係ない」「日本が自民族の為他民族と戦って居るのに、我々植民地民族に何の関係がある」[60]あまつさえ、「支那事変は日本が負ければよい」[61]のであった。しかし朝鮮人に対する皇民化政策は強化され、三九年十月には、内鮮一体の文章報国をめざす朝鮮文人協会が設立される。このような風潮がつのるなかで、自己と時代との関係を規定せざるを得なくなった葛藤を吐露したのが、「살구꽃처럼（杏の花のように）」（『文章』四〇・一一）である。

（試訳）杏の花のように

杏の花のように
杏の花のように
電光ニュース板に揺れる
戦争は　杏の花のように満開でした

音楽が血液のように流れる　今夜、
杏の花のように
杏の花のように舞いおちる落下傘部隊
落花だって花ではないですか
掃き捨ててどうするのですか
音楽が血液のように流れる　今夜、
青燕のように　飛んでくる銃弾に
真っすぐに正中線を射ぬかれて
杏の花のように、火を吐いて
杏の花のように落ちてゆくユンカー機
音楽は血液のように流れるのに、
月暈のような
月暈のような私の青春と
マジノ線との関係、ですか？
どうかそれだけは聞かないでください
音楽は血液のように流れ　流れて、
故郷の家から手紙が来ました
全州白紙のなかで揺れる

杏の花は
杏の花は戦争のように満開でした
音楽が血液のように流れる　今夜、
杏の花のように　いっそ咲こうと思います
音楽が血液のように流れる　今夜、
戦争のように
戦争のように　杏の花が満開でした
（六月三日）

そして四一年四月、『文章』廃刊號に発表された詩「航空哀歌（歸還抄）」は、実際は四〇年十月十六日、「杏の花のように」から四箇月後に執筆されたものである。「杏の花のように」「航空哀歌」「園丁」と、およそ一年半をかけて発表されたこれら三篇の詩を読み進めると、鍾漢の葛藤と合理化の過程を辿ることができる。

（試訳）　航空哀歌（歸還抄）

夕立のように
夕立のように襲う思念を
ひとつひとつ後悔のように振り切って
機首は対流圏を突破しました
この写真をごらんなさい、母よ
夕立のように
夕立のように襲う孤独を

煙幕のように過去に流し去って
一人聞いている二十七歳の爆音

エルロン*の方向にあるものを
僕は知る　あるいは知らないが
あなたは永遠の基地です、母よ
白髪が勲章よりも華麗です
あなたと高度計との距離の中だけに
虹のような僕の青春は空葬されるでしょう

この写真をごらんなさい、母よ

妹が机のかたわらに切り貼りした
メッサー・シュミット機の習性をごらんなさい
遠からずあなたの懐を離とうとする
十二歳の途方もない設計をごらんなさい

この写真をごらんなさい、母よ

夕立のように
夕立のように襲う記憶を
夕立のように機翼でかきわけて
離ってゆく息子の姿勢をごらんなさい

（一六・一〇月）

＊　方向舵

園丁[62]

年おいた山梨の木に、年老いた園丁は
林檎の嫩枝を接木した。
研ぎすまされたナイフを置いて
うそ寒い、瑠璃色の空に紫煙を流した
『そんなことが、出來るのでせうか』
やおら、園丁の妻は首を傾げた。
やがて、躑躅が賣笑した。
やがて、柳が淫蕩した。
年おいた山梨の木にも、申譯のやうに
二輪半の林檎が咲いた。
『そんなことも、出來るのですね』
園丁の妻も、はじめて笑つた。
そして、柳は失戀した。
そして、躑躅は老いぼれた。
『私が、死んでしまつた頃には』
年おいた園丁は考へた。
『この枝にも、林檎が實るだらう。

そして、私が忘られる頃には…』

なるほど、園丁は死んでしまつた。
なるほど、園丁は忘られてしまつた。
年おいた山梨の木には、思ひ出のやうに
林檎の頰ッぺたが、たわわに光つた。
『そんなことも、出來るのですね』
園丁の妻も、今は亡かつた。

反　歌

たらちねの母に障(さは)らばいたづらに
汝も吾も事成るべしや　　萬　葉

「杏の花のように」「航空哀歌」の印象的なリフレインは、「杏の花のように　いっそ咲こうと」することへの、すなわち内鮮一体と皇民化に向かって朝鮮の大地から「離ってゆく」ことへの鍾漢の躊躇と逡巡を映し出しているように思われる。「航空哀歌」では一歩進んでそれが自分自身と「母」への確認作業にもなっているが、「母」とはまぎれもなく〝朝鮮〟を意味するであろう。「白髪」は、伝統的な朝鮮の民族衣装の「白」を彷彿させる。

「あなたと高度計との距離の中だけに／虹のような僕の青春は空葬され」てしまうしかない。それでも「あなた（朝鮮）は永遠の基地」なのだ。鍾漢がこの詩を『文章』廃刊號に発表したのは象徴的である。

「園丁」では「内鮮一體に献身してゐるひとりの文化人の運命の因果の美しさと悲しさを歌はうとした」と鍾漢自ら記している。[63] 林檎は日本の、山梨は朝鮮の比喩であろう。引用された万葉集中の歌の大意は、「母に遠慮してぐずぐずしていた

ら、お前も私も二人の仲は成就しないだろう」というものだが、これが何を意味するかは詩の内容から明らかである。けれども「躑躅が賣笑し」、「柳が淫蕩した」という一見奇異な表現には鍾漢の無念の意が込められているように思われる。なぜなら、躑躅も柳も鍾漢にとって朝鮮という〝故郷〟を象徴する大切な花であるはずだからだ。[64]「あなたと高度計との距離の中だけに／虹のような僕の青春は空葬され」ることがわかっていながら、内鮮一体へ飛び立つことを強いられた「園丁」は死に、忘れ去られてしまう。その「運命の因果の美しさと悲しさ」。そして、実際、金鍾漢は忘れ去られてしまった。

「園丁」に続いて四二年三月一六日、『毎日新報』に発表された朝鮮語詩「春服」は、明らかに四一年『婦人畫報』三月號に発表された近藤東の詩「屋上から」の主題を踏襲している。

屋上から
（前二聯略）
私の着てゐる上着も
實は繭で造つた羊毛のイミテイション
しかし
これは失望ではない
戰爭が教へてくれた智恵なのだ
今日の私は
誰よりも早く外套を脱ぎ
誰よりも早く春を嗅ぎ
誰よりも早く働きにつく
そして　愉(たの)しい

春服（試訳）
誰よりも早く外套を脱ぎ
誰よりも早く春服を着た
戰爭のなかに　春がめぐり
温かい日和　きょうきのう
（以下三聯略）
ああ戰爭のなかに春がめぐり
軍用機が光に濡れて飛び去ったあと
温かい日和　きょうきのう
水銀のように心は跳ねあがる

「園丁」や「春服」に見られる先駆者意識は、『國民文學』創刊號の巻頭言「朝鮮文壇の革新」で崔載瑞が宣言したような、「何よりも爽やかになりたい。じめ〳〵した、或いはおど〳〵した今までの智識人の表情を棄て信念に満ち意欲に燃える智識人になりたい。」という意識の発露ではないだろうか。

「園丁」以後、遺作「急性肺炎」（『新時代』四四・一一）迄に発表された43篇（『たらちねのうた』所収の13篇を含む）のうち、四四年に発表された12篇はすべて朝鮮の風土・風物に取材したものであって、四二・四三年に発表された31篇のうちの20篇が、時局を題材としたものである。20篇のうち6篇は『たらちねのうた』に再録されているので、正味14篇である。

このうち、徴兵の詩と題された「幼年」（『國民文學』四二・七）、「待機」（副題　再来・一二月八日　『國民文學』四二・一二）、及び「待機」が朝鮮語で改作された「朝陽映發」（『毎日新報』四三、一、九）の三篇は、「幼年というものと時局との対照感のなかに、何か詩的真実があるのを発見」[65]して書かれたものだと思われる。

ひるさがり、
とある大門の外で、ひとりの詩人が
坊やのグライダアを眺めてゐた
それが五月の八日であり
この半島に、徴兵の布かれた日だつたので
彼は笑ふことが出来なかつた
グライダアは、彼の眼鏡を嘲つて
光にぬれて、青瓦の屋根を越えて行つた
（「幼年」　最終聯）[66]

たしか　きょねんの　一二月八日にも
雪がちらつゐてゐた　あれから一年

たたかひはパノラマのやうに
みんなみの海へひろげられていつた
そしてきみたちは　ごはんのおいしさをおそはつた
またいとこよ　いもうとよ　おとうとよ
きみたちのうへに　雪がちらついてゐる

雪がちらつゐてゐる
ながいながい　昌慶宛の石垣づたひ
かくも季節のきびしさにすなほな　きみたちに
あへてなにをか　いふべき言葉があらう
雪がちらつゐてゐる　しんみりしづかに
いもうとよ　またいとこよ　おとうとよ
雪がちらつゐてゐる　きみたちの成長のうへ
ひひとして　雪がちらつゐてゐる

（「待機」　三聯及び最終聯）[67]

「幼年」に見られる詩人の内心の鬱屈が、「待機」にはない。〝待機〟とは、兵として召される日を控えての待機であり、「朝陽映發」ではそれが「大きくなってわたくしたちも戦うのだ（試訳）」という直接的表現に転化している。

正午の黙禱時間の群衆をうたった「風俗」（『國民文學』四二・六）は、鍾漢が評論「藝術에잇어서의（においての）非合理性」（『東亞日報』四〇、二、二二・二四）で言及している〝ユナニミスム〟の理論を適用したものであろう。[68]「童女」（『國民文學』四三・六）、「子福」（『たらちねのうた』所収）、辻詩「草莽」（『國民文學』四二・八）も銃後風景をうたったものである。

「合唱について」（『國民文學』四二・四）では、〝大東亜共栄〟を謳い文句に「ただ歌ふことだけが殘されてゐる」切羽詰まった状況を象徴的に描くことに成功している。

合唱について[69]

君は　半島から來たんぢやないですか
道理で　すこし變つた貌(かほ)をしてゐると思つた
でも　そんな心細い想ひをすることはないですよ
ほら　松花江(スンガリイ)の上流からも　はろばろ
南京の街はづれからも　來てゐるではないか
スマトラからも　ボルネオからも　いまには
重慶の防空壕からも　やつて來るでせう
では　みんな並んで下さい　――おお
砲口のやうだ　整列した・口・口・口・口・口・口・口・口
それは　待つてゐる　待ちあぐんでゐる
タクトの指さす方向へ　未來へ
やがて　聲の洪水が發砲されるでせう
くりひろげられた　煙幕のやうに
餘韻は渦巻いて　渦巻いて流れるでせう

このステエジの名を　君は知つてゐる
このステエジの名を　私も知つてゐる

ほら　タクトが上つたではないか　指揮刀のやうだ
（もはや　私には云ふべき言葉がない）
ただ　歌ふことだけが殘されてゐる　聲を限りに

ただ　歌ふことだけが殘されてゐる

―詩集『一枝について』抄[70]

一九四三年四月一七日に発足した朝鮮文人報国会で、鍾漢は、金龍濟、則武三雄、林學洙らとともに詩部会幹事に選出され[71]、「海軍を讃える詩朗読会」や「米英撃滅のための辻詩街頭移動展」などに携わるが、同年八月に中堅詩人七人[72]で連載された「**님의 부르심을 받들고서**（君のお召しを受けて）」に寄稿した作品と、辻詩「海」（『國民文學』四三・六　後に「海洋創世」と改作されて『文藝』四三・九に掲載）、辻詩「樹」（『國民文學』四三・七）の三篇は、所謂「時局的」作品である。

「海に行ってもいいじゃないか／山に行ってもいいじゃないか」（試訳）とうたう「君のお召しを受けて」は、艦隊・南十字星・密林・高山植物・夜営といった情景を紙芝居のように並べ、「たまには戦闘機の翼にぶらさがって／空の階段を登ってもいいじゃないか」と繰り返すのだが、戦闘機を観覧車のように扱ったところで、「何のために、誰のために戦うのか」と呻吟している朝鮮人の現実に対して、この程度の貧弱な文学的虚構性は吹っ飛んでしまう。したがって単なる時局迎合詩ではない、鍾漢の意図を汲み取ることはできるが、作品としては却って白々しい結果に終わっている。「あの日から　この半島に／海軍特別志願兵の決つた／あの日から／海は私たちのものとなつた」と詠嘆する「海」の失敗も同様である。「樹」には署名がなく〝読人不知〟とされているが、「うつとりと／一ぽんの樹が黙してゐる。」という独特の言葉遣いから、鍾漢の作と考えてよいだろう。

「おびただしいてのひらで／ひかりの亂射を受けどめ（ママ）ながら。／それがそのまま／戰ふにつぽんの姿勢であるやうな／一ぽんの木よ。絶對の生命の美しさを／あへて自任でもしてゐるやうに。／威壓されさうな炎天を指さして／一ぽんの樹が／うつとりと黙してゐる。／夕立がくるのであらう。」好意的に解釈してこの詩が「一本の樹の生命の美しさ」をうたおうとしたものだとしても、これが『國民文學』誌の扉に掲げられた辻詩であれば、やはり作者の意図は「戰ふにつぽんの姿勢」をうたうことにあると受取られても仕方ないのではないか。

以上のように四二年から四三年にかけて『國民文學』誌の編輯に携わるとともに、〈国民文学〉実践の結果として14篇の詩を残した鍾漢だが、四三年九月以後、鍾漢の詩からは時局的な色彩が消え、前述したとおり四四年に発表された詩はすべ

て、日本語で書かれているけれども、朝鮮の古典や風習、風物、自然に取材したものばかりである。

このような転機が訪れた背景については、『國民文學』四三年九月號に掲載された、牧洋と呉禎民（オジョンミン）との対談「文學鼎談」の中の次のような発言から窺い知ることができる。

（前略）ちようど一年ばかり前の革新運動ね（中略）あゝいふ風にして革新運動といふものをやつてしまへば、その反動として一時的な氣持の上での何か空虚なものが來たと思ふんですよ。（中略）そののち何か心の據りどころを考へるとか、感ずるとか、することはなかつたですか。僕などはどうにも仕様がなくて、扶餘に行つてみたんですが、そこにある佛像やら、それから百濟の陶器――これが實に美しいんですよ、大らかで、優雅で、さういふものをみて、かういふ素朴な美しささへ持つてゐれば、たとへば僕らが政治の上で、解決しなければならないこととか、個人とそれとの繋がりとか、さういふものが何だか解決されたといふ氣持を持つたんだけど（中略）ともかく、それをみてゐると何か心に満たされるものがありますね。

九月には『新時代』に次の詩が掲載されている。

放送局の屋上で

放送局の屋上で
おれは　時間について考へてゐる
石垣に錦蔦（にしきづた）そまり
アンテナには初秋が放送され
雲が流れてゐる
戦闘機が咳（しはぶ）いてゐる

三十になると戀ができない
きみ過ぎし日になにをかなせし

うつとりと　陽ざしをあびて
ポプラが體をゆすつてゐる

それは悲しまない
ポプラも　三十になつたのかも知れない

おれの脳漿に鋸をあててゐるのは
だれなんだ　……虫がないてゐる

放送局の屋上で　おれは
紫外線のなかに風葬されてゆく

この詩に漂う空虚感は「文學鼎談」で語られた空虚感と同質のものであろう。以後、鍾漢は時局的な詩を発表していない。扶餘は百済の最後の首都であった。百済の国は千年以上も前に滅亡した。しかし百済の文化、百済の美は滅びていなかった。時あたかも、日本の敗色は刻一刻と濃くなっていった。四二年六月のミッドウェー海戦大敗を機に、戦局は〝転進〟と玉砕を重ね、四四年七月ついに東条内閣は総辞職する。このような時局の趨勢と平行して、鍾漢は「龍飛御天歌」（『國民文學』『新時代』ともに四四・一）、「連峯霽雪、雪中故園賦」（『春秋』同・三）、「歸農詩篇／族譜、歸路、染指鳳仙花歌」（『朝光』同上）、「金剛山、瀑布」（『新時代』同・六）、「白馬江、百濟古甕賦」（『朝光』同・九）といった、朝鮮の風土を題材とした諸作を発表する。そのうちの一篇を次に挙げる。

族譜[73]

藁ぶきの家を建てて、おじいさんは
しだれ柳を植ゑることを忘れなかつた
石垣のそばに井戸をほつて、おばあさんは
夜ごと星と月を培養した
おぢいさん(ママ)の建てた家にすみ
おばあさんのほつた井戸の水をのみ
百姓の子はなんといつても
百姓になるに限るやうだ
三千坪の美田もある
雨の日は唐詩選を繙きもしやう
らんぷの懐かしさはなくなり
電燈の世の中に變りはしたが

鍾漢の詩作の変遷は、故郷の農村風景（「古井戸のある風景」等）や、故郷を離れた悲哀（「連峯霽雪」等）をうたうことに巧であった鍾漢が、〝民族の故郷〟をうたうことに帰着していった過程として捉えることができると思うが、それについては次章で考察したい。

3、翻訳

金鍾漢は、自作の自訳以外に、朝鮮語詩を二十七篇、小説を一篇翻訳している。朝鮮近代詩の日本語訳は、同時期に金素雲(キムソウン)が、『乳色の雲』（四〇・二　東京　河出書房）、『朝鮮詩集　前期』『同　中期』（四三・八及び一〇　東京　興風館）で手

懸けており、それに比べると鍾漢の仕事の量はさして多いとはいえない。けれども、そのようなものを手懸けたことこそ、当時の状況において問題とすべき点である。個々の翻訳作品の検討は他稿に譲るとして、本節では鍾漢の翻訳に対する姿勢について言及しておきたい。

a、詩

鍾漢が訳した二十七篇の内訳は、

鄭芝溶（チョンジヨン）一一篇、白石（ペクソク）七篇、金尚鎔（キムサンヨン）二篇、そして、朴鍾和（パクチョンフア）、金東煥（キムトンファン）、金億（キムオク）、林學洙（イムハクス）、朱耀翰（チュヨハン）、洪思容（ホンサヨン）、柳致環（ユチファン）（作品順）

が一篇ずつである。これらの翻訳詩は、『雪白集』に収められる以前にも、『モダン日本　朝鮮版』（三九・一一と四〇・八の二回発行）に発表されたものがある。三九年一一月號に掲載された三篇、すなわち朱耀翰「鳳仙花」、白石「焚火」、鄭芝溶「白鹿潭」は、直訳的な分かち書き（助詞と語尾は前の単語につけ、各単語ごとに一マスあける）や、漢字の当て方、語句等を修正して、『雪白集』に再録されている。四〇年八月號に掲載されたのは、朴鐘和「白魚のやうな白い手が」、金尚鎔「螢」、金東煥「罪（民謡）」、金億「西關（民謡）」、林學洙「哈爾賓驛にて」の五篇である。このうち「罪」は「ぬれぎぬ」と改題、修正されてやはり『雪白集』に収められた。[74]

翻訳における鍾漢の詩人及び作品の選択は、『雪白集』の「あとがき」に書かれている次のような姿勢に起因するようだ。

詩に關する限りに於ては、私は小さいなりに獨裁者でありたい。だから私には、半島詩壇の一覧表を作るとか、分布圖を描くとかいつた器用なまねは出來るはずがない。

私が他人の詩を譯したり、編したりするのは、その詩篇のなかに私自身の分身を發見しうる場合に限られるのである。さういふ意味で、譯詩はひとつの獨立した創作として許容されてゐるのだらう。

そして『雪白集』編纂の意図については、『國民文學』詩上にたびたび掲載された広告のなかに「著者の言葉」と題して端的に語られている。

私自身がひとつの大きな貯水池となつて過去の朝鮮の詩心を咀嚼し、それを國民的な立場から再編成して未來へおし流さうと試みたのがこの詩集です。このやうな小さい仕事にも七年間の努力を要しましたよ。詩はむづかしい

また、『雪白集』の「あとがき」には次のように記されている。

本書は、博文書舘主・瑞原聖兄から依囑されて譯・編したものである。（中略）本書を讀む人は、彼がもし半島人であるならば、かふいふ世界史の轉換期に自分が半島に生れあはせた愉悦に慟哭せざるをえないだらうし、また彼がもし内地人であるならば、今まで半島の土を蹈んだこともないやうな人でも、卽坐に半島に對して血液的な愛情を持たざるをえなくなるだらう。―さういつた慾の大きい意圖で編したのであるが、結局意圖は意圖のまま殘され、紙面的實在として現れたものは、ごらんの通りのはづかしい花束である。

けれども、鍾漢が朝鮮語詩の翻訳を手懸けた本来の動機は、『雪白集』が刊行される一ケ月前の『文化朝鮮』初夏號（四三・六）に掲載された随筆「朝鮮の詩人たち」の中に、むしろよく語られていると思われる。

佐藤清氏の『碧靈集』については、私も数回にわたつて言及したのであるが、内地に移出しても第一級の詩集であらうといふのが世評であり、相場であつた。

しかし、私たちが諺文系の詩人たちに目を轉ずるとしたら、そこには洪思容、鄭芝溶、白石等の第一級の詩人を發見するだらう。そして、佐藤氏があくまでも努力の詩人であるに反して、これらの詩人が如何に天性の詩人であるかに驚かざるをえないだらう。（中略）

朝鮮は詩の國であつた。小説は内地に移出するやうな傑出したものは無かつたやうだが、詩だけは無盡藏に埋藏されて、立派な翻訳家の出現を待つてゐる。さいきん私は、博文書館から、『雪白集』といふ翻譯集を出しながら考へたことであるが、金素雲氏や私等がやつた仕事は、朝鮮の詩の九牛の一毛を紹介したに過ぎない。

「新半島文學への要望」といふ座談会（『國民文學』四三・三に掲載―筆者注）で、菊地寛氏が面白いことを述べてゐる。

「諺文でしか書けない作家でも、非常に良いものを書けば、翻譯する人は幾人もあるのぢやないか。非常に優れた人なら

ば、諺文で書かして友達が譯してやればよいからね。翻譯者も適當に得られないやうな作家ならば、どうせ大したことのない作家で、そんなに悲しむにも當らないぢやないか」

以上私が紹介した三人の詩人は、菊地寛氏のいはゆる、「非常に優れた人」なのであり、だからこそ諺文で書いても殘されてゆく人たちなのである。（傍点は引用者）

傍点部分に込められた真意を理解するためには、当時、朝鮮語と朝鮮文学がいかなる状況に置かれていたかを想起する必要がある。たとえば金素雲は、『朝鮮詩集　前期』の「覺書」に次のように記している。

朝鮮語はすでに終止符を打たれようとしてゐる。生活の隅々から影を消すといふのではないが、活きた社會的機能はもうこの言葉にはない。雜誌も新聞も、朝鮮語によるものは殆ど九割が廢刊されてゐる今日、何によつて朝鮮の作家や詩人たちはその表現意慾を充たすべきか。かりに作品ありとするも、今後七、八年を出でずしてそれを讀む者が無くなるのではあるまいか。―（中略）國語による作品はすでに試みられてをり、將來への希望をこれに繋いでゐる新人も多い。しかも、これはどこまでも「試み」であり、「希望」である。（中略）こゝで一歩を誤れば傳統が破壊される。朝鮮文學の、やうやくこゝまで育て上げた命脈が斷ちきれてしまふ。

伝統の問題について、鍾漢は「朝鮮詩壇의進路―特히國民詩과關聯하야―」（『毎日新報』四二、一一、一三～一七）において次のように述べている。

ところで最近、国民詩というものを書く詩人たちには、伝統というものが一つもないのだろうか。金村龍濟・趙宇植・朱永渉・金折洙等をはじめとして、さまざまな新しい詩人諸氏の詩には（私もそのうちの一人だが）朝鮮の伝統も内地の伝統もないが、寒心にたえないことである。（中略）私は今までも、国民詩を書こうとして過去の諺文詩を研究しようとする友人に会うことができなかった。そして内地の古典に対して出色の造詣がある方もいないようだが、このままいくと詩壇は素人天下になるのではないか。それこそ時代が変わればもちろん詩も多少は変化するだろう。（中略）しかし、それが伝統を無視してもよい理由にはなりえない。（中略）朝鮮においては、文学も評論も伝統を形成する前に戦争が起こ

り、評論家や作家は革新せねばならない課題にぶちあたったのである。しかし、詩だけは、たとえ少数の天才に依ってではあっても、ともかく伝統というものを形成していると私は信じる。[75]（試訳）

したがって、「諺文で書いても殘されてゆく人たちなのである」という鍾漢の発言は、翻訳するという名目で諺文文学の存続を仄めかしたものであり、翻訳するという作業によって伝統を見失うまいとしたことが窺われるのである。

鍾漢は、朝鮮古謡の翻訳も手懸け、東京に居た頃佐藤春夫に見てもらったりしていたが、[76]『雪白集』の「あとがき」には、「朝鮮には、小倉進平博士などによつて再發見せられた、新羅鄕歌などの高雅な古詩がある。萬葉言葉でも身についてきたら、男子一代の仕事として譯出してみやうとも思つてゐる」と記されていることを付記しておく。

b、小説

小説の翻訳は、李孝石（イヒョソク）作「皇帝」の一篇のみである。

鍾漢が初めて李孝石を知ったのは、鍾漢が鏡城高普の学生の時で、孝石は同じ鏡城の農業学校で教鞭をとっていた。鍾漢はたまに路上で孝石に出合うことがあったが、その時は決して挨拶も訪問もしなかったという。その後、一九四〇年の夏に『婦人畫報』朝鮮特輯號を出そうとして京城（現在のソウル）にやってきた鍾漢が、孝石に和文創作を手紙で依頼し、その時から文通が始まったらしい。[77]

「…暗い。騒々しい。雷鳴。稲妻。」（鍾漢訳）という印象的な書き出しで始まる「皇帝」は、もともと一九三九年七月『文章』第七輯臨時増刊、「創作　三十四人集」に発表された。李孝石は四二年五月二五日に死亡したので、追悼の意を込めて鍾漢が『國民文學』四二年八月號に翻訳して発表したのである。「皇帝」は、鍾漢によれば、「コルシカ島に亡命したナポレオンの心情を悲劇的偉大性にまで高めようとした」[78]（試訳）ものだが、ナポレオンに仮託して、朝鮮国王の心境を寓意したように読みとれる箇所もある。[79]鍾漢の訳文は原文に忠実でしかも日本語として不自然さがなく、翻訳家としてもすぐれた能力を持っていたことが窺われる一篇である。

筆者はこれまで金鍾漢の生涯と作品とを概観してきた。次章では、文学者としての彼の、文学や時代に対する姿勢を考察したい。

四　文学観と時局認識

1、地方主義

金鍾漢が、詩「園丁」及び評論「一枝の倫理」を『國民文學』に発表したのが縁で同誌の編集に携わるようになったことは前に述べた。

「一枝の倫理」は、(1)神話というもの、(2)原理というもの、(3)主題というもの、(4)永遠というもの、(5)国民文学というもの、(6)政治というもの、(7)地方というもの、の七節から成るが、鍾漢は別の場所で「國民文化における地方文化のありやうともいふべきことについて『一枝の倫理』といふ題で書きました」と述べ、その主張を〝新地方主義〟と名付けている。[80]「一枝の倫理」において鍾漢は国民文学に対する彼の立場を明らかにしたが、国民文学の前提として〈地方主義〉を提言したのである。

鍾漢が国民文学というものをどのように受けとめ、実践しようとしたか。(6)政治というもの、において鍾漢は国民文学の理念を次のように主張し、恐らくは、それを「一枝の倫理」として自らに課したのであった。

事変以来、内地文壇で発表された国民文学への過渡期的作品を見ると、おおよそ二つの類型があるようだ。一つは、芥川賞の「平賀源内」や船橋聖一氏の「捨石」のように作家が読者を教育しようとする態度であり、もう一つは「ノロ高地」「南海封鎖」等の素人文学、乃至は火野文学のように、作家が国民と運命をともにしようとする文学的態度であった。たぶん後者がこれからあるべき国民文学の正常的な道ではないかと思う。（試訳　傍点は著者）

そして、(7)地方というもの、において「私たちは日本国民としての朝鮮人のアリカタ［アリカタは原文日本語］を考えると同時に、国民文学としての朝鮮文学のアリカタを考えることによって、地方作家の奉公の可能性と方法を発見することが出来るだろう」（試訳）と述べ、その前提として、戦時食料問題を例にあげ、朝鮮米の内地移出高が一千万石を越えることによって帝国の戦時食料問題の不安定を解決できるのだから、朝鮮の農村で米を作る農民は、「第一線で血を流している皇軍」と共に帝国の臨戦体制の第一線に立っているのであり、そのような自負と自覚を持つ時初めて、一地方で奉公する自身の地味な職域に安心立命することができる、と言う。これは、〝朝鮮人はもはや充分に日本国民として待遇されて然るべき

だ〟という提言であると思われる。なぜ鍾漢はこのように発言せねばならなかったのだろうか。『雪白集』の「あとがき」には次のように記されている。

（前略）半島人の翼賛は、半島といふ日本のひとつの地方の土に安心立命することから初まると思つたからである。その場合もつとも困難なことは、半島文化の實情として、何か民族的なものと混同されたり、誤解されたりすることである。長いあひだ私は、この二律背反的な問題で苦しんだ。しかし、最近はある信念を持つやうになつた。つまり、半島の詩人たちが如何に時代と戰爭を歌つてみても、それが皇国の一地方である半島の土と自然性に根ざすものでない限りは、空虚な觀念的なものに終り、讀者に感銘を與へないといふことである。（中略）そのかわり、もはや半島の詩人たちは、彼等がどんなに自然發生的なものを歌つても、それが今日あつてはならないところのかの民族的なものとは、決して混同されないぐらゐ、人間的に國民として信頼されてよい時期だらうと思ふ。

鍾漢は、「国民と運命をともにし」「朝鮮の土と自然性に根ざすもの」をうたうことが、「民族（主義）的なもの」と混同され、弾圧されることを恐れたのであろう。鍾漢の恐れが杞憂でなかったことは、座談会「新しい半島文壇の構想」（『緑旗』四二・四）の席上で、〈地方主義〉を主張した鍾漢に対する津田剛や田中英光の反応から容易に窺われるのである。

金　實際問題として、今のところ中央文壇より朝鮮文壇ははるかに低いのだから、同じ水準にしてゆく熱心さがなければならない。しかし、論理的に考へた場合は、東京が中央でなくていゝ。いくつもの地方が集つて一つの中央になる。必ずしも東京が中央ではない。（中略）

田中　さういふ點ではいゝんです。しかしこれを政治的に云はれるのなら反對ですよ。やはり中央集權で好いんですがね。

金　さうぢやないね。地方人が、その地味な職域に安心立命できる原理みたいなものが欲しいのですよ。

田中　金さんの云ふのは作品の發表機關とか讀者層とかさういふ問題なんですか。具體的にいへば。（笑聲）

金　さうぢやないですよ。

津田　さういふ主張を古い連中は内地の文壇からはなれて民族的なことばかりしようといふ。だからね、今度は健全なグループからさういふ主張と實践を進めるんですね。

田中　それは賛成、賛成。

東京も京城も同じ全体（＝国家）においての一つの空間的単位に過ぎないと考え、兵站基地として以上に、文化的にも「東亜の中心としての朝鮮」を建設しようというのが、鍾漢の〈地方主義〉論の骨子であった。朝鮮文学が、内地人の感情移入に利用されるだけの地方色を売り物にするような見世物的存在になりさがるのではなく、あるいは東京文壇の亜流に甘んじるのではなく、朝鮮が位置する地政学的（地域的）特殊性に依って、自律的な存在理由を獲得せねばならないと主張したのであった。

鍾漢のこのような主張に崔載瑞が共感し、『國民文學』は「二人の共同企画」となったのだが、結果として鍾漢が崔載瑞と訣別するに至ったのは、文学や時局に対する両者の姿勢の相違に因るのであろう。〈国民文学〉実践において、崔載瑞は、朝鮮人が日本的になろうとする意欲こそ朝鮮的な題材だと考え、日本人になるにはどうすればよいかを悩み、最終的には「日本人とは、天皇に仕へ奉る國民である。」と結論して「まつろふ文學」へと移行していった。[81] それに対し、鍾漢は「國民的な信念が深くなればなるほど、朝鮮の服をきて、朝鮮の温突にねてゐても、立派な皇民になれる」[82]と考えたのだった。

2、史　詩

『史詩』というのは鍾漢の造語であるが、これは、彼が評論「新しき史詩の創造」（『國民文學』四二・八）で主張した作詩の態度であり、「作家が国民とともに運命をともにしようとする文学的態度」の実践であると言えよう。

大東亞戰爭のさなかで揺れながら、私は妙なことに思ひついた。むかしの詩人たちのやうに、英雄を歌ふことにしたのである。（中略）

だから私は『園丁』では内鮮一體に獻身してゐるひとりの文化人の運命の因果の美しさと悲しさとを歌はうとした。『合唱について』では、大東亞の建設に参與する半島人の風貌と感激とを壁畫しやうとした。『風俗』を書いた動機は、京城の街で黙禱する集團が英雄的な荘厳さでせまつてきたからである。（中略）

何も賣物にするつもりではないが、かういふ作詩の態度は、ひとつのまとまつた主張や作品行動としては、内地でも誰

も試みてくれないので、手本がなくて心細くてならない。もしゐたとしても、わざ〳〵内地からやつてきて、半島の新しい英雄たちを歌つてくれるやうな物好きな詩人もゐるまい。だから、下手くそであるまゝに、小さい自負を持つて歌ひつゞけて行けば、多少はお國のためにもなるだらうと考へてゐる。

たとへば、大東亞建設といふ國民的理想と意慾があつたとする。私が主としてそれから感じうる詩的なものは、その『理想』ではない。それを建設したくて血を流し苦しむ國民の『人間』としての生命力と眞實の美しさに限られるのである。だから、最悪の場合があつて大東亞といふものがひとつの國民の夢想に終つたとしても、それを希求してやまなかつた『人間』たちの國民としての生命力と眞實は、永遠につながる詩的美しさとして殘りうると考へてゐる。

文学には、もともと、時間的な一面と、絶対的ではなくても比較的永続的だと言える一面があるようだ。現代の私たちとは生活様式が異なる古代の作品から私たちが感じる感動は（中略）むしろ、古代人の思惟情操の永遠的な人間性ではないだろうか。[83]（試訳）

けれども、鍾漢の言う「国民としての生命力と真実」が、朝鮮人の側に本当にあり得ただろうか。それは決して真実などではなく、強いられた現実に過ぎなかったであろう。一方で支配者が〈国民文学〉に要求したものは、明朗・健康・時局認識であり、検閲を懸念して作家たちはもはや不安や懐疑や煩悶を率直に扱うことは出来なかった。鍾漢が「国民と運命をともにしようとする文学的態度」をとる限り、この矛盾を避けては通れないが、彼は次のような文学的信念を以て、現実と対峙したのである。

苦悩自体に価値があるのではない。その苦悩を如何に受理し、芸術性にまで昇華させるか、というところに文学の本領があるのである。[84]（試訳）

現実の重圧とは、詩人には感動の多彩を意味する却つて幸福な創作動機の条件となることもできるのである。[85]（試訳）

現下に於ける文學者の仕事は、暗い面を、文學することに依つて明るいものにまで昇華してみせることに、誠實なウソのない作家道があると思ふ。[86]

いよいよ朝鮮にも陸海の兵制實施が決定された。兵としての生活、大陸での生活、海洋生活など、それが朝鮮文學の素材の領域に驚くべき大いなるものを附加したことは喜びにたえない。

しかし、問題はそれの文學的受理にあるであらう。文學といふものは有難いもので、與へられた如何なる條件の中にも、私たちはそれなりの美しい「調和」を發見しうるのである。この調和こそ、レアリティといふものであり、文學が實在的な「もの」となりえた作品なのである。（中略）これからのあるゆる朝鮮の作家たちは、讀者への責務として、その苦難な道をひらいてくれるであらう。

その時になつて、はじめて讀者は、文學のみに依つて享受しうる、徵兵問題の愉悦を滿喫されもするであらう。[87]

前章で概觀した鍾漢の14篇の『史詩』は、時代的なものに「永遠的な人間性」を求め、「永遠につながる詩的美しさ」を実現しようとした試みであった。今日読み返すかぎり、それらの詩篇が芸術的に成功しているとは言い難いかもしれない。特に「朝陽映發」「海」（「海洋創世」）「君のお召しを受けて」の3篇は、昂揚した感情の列記や詠嘆にとどまり、内容的にも決意表明や現実解釈の方便にしかなり得ていない。「評論はスポーツ、小説は排泄、詩は祈り」[88]だとうそぶいていた鍾漢であったが、李石薫に向かって二、三度「小説が書きたい『老教授一人旅』みたいな作品を構想してゐますよ」と漏らしていたという。[89] 鍾漢の作詩方法、すなわち、感動状態の最高の瞬間を裁断して示すというやり方では、「暗い面を、文學することに依つて明るいものにまで昇華してみせること」が難しかったのだろう。詩の叙事的要素に着目して『史詩』を提示した鍾漢であったが、もともと彼は、記録性や報道性や実用性と、芸術性とを区別せねばならないと主張していた。散文に対抗して詩自体の独自性と自律性とを展開しようとした。[90] けれども、戦争への協力ないしは戦意高揚用の文学しか容認されなくなってゆく状況において、鍾漢はついに次のように言わざるを得なかった。

それにしても、文化と時代との調和、には限度といふものがあるやうな氣がしてならない。たとへば、芭蕉のやうな國民的な詩人になると、今日的な價値を超越して國民精神の「今日」に君臨してゐると云へよう。

利久にしてもさうだ。だれも、利久を引っぱりだして戰爭遂行に役立たせやうと考へたりするものはゐないだらうが、大東亞文學者大會では支那の代表たちに日本の文人たちが示したのは、やはりかれの茶道であつた。

私たち後裔が、芭蕉や利久に示しうる最大の禮儀は、かれらの國寶的ですらある文化性を守りぬくために戰爭に勝つ日までは、かれらをそツとしておくことであると思ふ。（中略）

それは、私とても、文化と時代の調和については誰にも負けないくらゐ苦しんできたつもりである。しかし、野菊までたづぬる蝶の羽がおれたのだ。羽のおれた蝶は、せめてジヤアナリストとしてでも、御奉公の道を見つけて行かねばならない。（中略）戰爭が終る日までは、現地へ行かされない限り、さういふ生活に充實でありたいのだ。[91]

3、永遠の母（たらちね）

詩題はなんであらうと、モテイブはつねに、永遠の母（たらちね）への鄉愁であつた。[92]

金鍾漢という詩人に特徴的なことは、彼の〈永遠〉への志向である。〈永遠〉に連なることへの激しい希求が、常に彼の詩作の根底にあった。その場合に、時代的なものに「永遠的な人間性」を見出そうとする傾向は、鍾漢がまだ新民謡作家であった頃から見られるものである。

交通の発達と生活様式の統一は、急速に鄉土性を喪失させている。故に時代性が次第に一層強化されているのだ。そして時代性の上に、切実な人間性が現れるであろう。もともと近代人には、鄉土感よりは時代感の方が切実な実感であろう。（中略）彼らの鄉愁は、鄉土に対する鄉愁ではなく、時代感の反動としてわき起こる、永遠に対する鄉愁である。[93]（試訳）

「近代人には、鄉土感よりは時代感の方が切実な実感」という意識は、「（筆者注－詩集『白鹿潭』において鄭芝溶が）『自然』に終始したように、新しい時代の詩人たちが『人間』や『戦争』や『時代』に対して、より大きな取材の興味を感じるのは当然なことだ」[94]という意識に発展して『史詩』を生んだ。

一方で、そのような『近代』というものへの疑問から、彼は〈地方主義〉に目覚める。近代化されてゆく生活様式と昔ながらの農村の生活感情との軋轢を目の当りにして、「鄉土性の敗北と時代性の勝利」[95]を実感し、「藝術や科學は超國境的なも

のとされてゐた時代だつたから、さういふもののなかに心のふるさとを見つけやうと」して東京に留学した鍾漢であったが、「だんだん慣れてみると、東京や近代といふものが如何に空虚なものであるかといふことに氣づいた。そのごろから私は、地方主義の建設者マウリス・バレエスなどに興味を感ずるやうになつた。柳田國男さんに敬服し、福士幸次郎さんの行状を見守つたりした」[96]のであった。

「朝鮮詩壇の進路」において、鍾漢は次のように述べている。

最も厳正な意味では、朝鮮にはモダニズムというものは無かった。ソウル（ソマウルマ）の生活も一種の半都市的な生活に過ぎないのだ。所謂『近代』的な都市生活ではなかった。近代的な生活が無い所に本当の近代主義があった筈がない。[97]（試訳）

鄭芝溶氏の詩心の故郷は自然自体であるようだ。（中略）『土』に透徹したこのような詩情は、戦争を素直に肯定していたすべての若い詩人たちが、年輪とともに結論を帰するべき詩の故郷ではないかと思われる。[98]（試訳）

金鍾漢の基本的な発想は、①〈「農村」（地方）と都市（中央）〉、②〈「自然」と「戦争・人間・時代」〉、③〈「永遠的なもの」と「時間的なもの」〉という三点に立脚していた。それらが絡み合って彼の文学を産み、結局は鍾漢の「永遠に対する郷愁」は「永遠の母（たらちね）への郷愁」として、朝鮮の『土』と『血』に帰着したのだった。

五　おわりに

一九四一年に至って、朝鮮人作家たちに日本語による創作が強要された時、彼らには「抵抗文学を書き続けて獄死、刑死をするか、かろうじて海外へ亡命、脱出するか、国内で筆を折って沈黙するか、あるいは与えられた制約の中で、なおかつ〝文学〟を続けるかの選択肢」しか無かった。[99]後二者において「文学者とは言語によって形象化する者を意味する。この基本命題と、朝鮮文学者は朝鮮語によって形象化するというもう一つの基本命題のいずれを選択するかは、もちろん親日だとか反民族的だとかいう一つの尺度のみで規定するのは困難」[100]であり、たとえば、「崔載瑞が『国民文学』を主宰しつつ日本主義・国家主義にのめり込んで行く過程は深刻であり、単に御用文学者とのみ片づけられぬものを秘めている」ことを三枝壽勝氏は明らかにしておられる。[101]本稿では、金鍾漢という詩人が、当時のような状況において、個人としての主体性と朝鮮

人としての独自性を捨てず、最期まで文学者として誠実に生きようとしたことを、彼の遺した文章から明らかにしようとした。そのような彼の文学的営為は「古井戸のある風景」「連峯霽雪」「合唱について」といった諸篇とともに、朝鮮の文学史に記憶されてよいと思われる。

本稿をまとめるにあたって、資料をお貸しいただいた、故　梶井渉先生、基本的な視点を提示してくださった大村益夫先生、全般にわたって指導してくださった白川豊先生に感謝の意を表します。

（一九八八年一月稿・十一月改稿）

註

（1）大村益夫訳『親日文学論』（高麗書林、一九七六）一頁。
（2）三枝壽勝「一九四〇年代前半期の小説について」（『朝鮮学報』第八十六輯、一九七八）一一六頁。
（3）大村益夫「金鍾漢について」四六八頁
（4）『「酔いどれ船」の青春　もう一つの戦中・戦後』一四二頁。
（5）同右、八四頁。
（6）「鰯抒情」（『新時代』一九四三・一）一二三頁。
（7）同右。
（8）『朝鮮日報』一九四三・一・二。
（9）摩天嶺以西の地方。平安南北道および黄海道の北部地方。
（10）鄭炳昱編『時調文學事典』（新丘文化社、ソウル、一九八〇）七〇三頁。
（11）朴燦鎬『韓国歌謡史　1895－1945』（昌文社、一九八七）によると、朝鮮のレコードで新民謡の呼び名が登場するのは一九三〇年前後のことで、「朝鮮の新民謡創作の動きは、日本での〝新民謡運動〟に触発されたものであろう。日本では一九二〇年代半ば頃から、（中略）各地で新しい民謡を作る気運が生じたが、（後略）」（一三六頁）とある。
（12）『東亞日報』一九三六・一・一四。
（13）影印版の印字不明瞭のため判読不能。
（14）鏡城高普への入学年、同校卒業年は正確には不明。『東亞日報』紙上では、「螢雪의功績　學窓의기쁜날물리」（一九三四年）「榮譽의卒業生

들(たち)各地男女中等校」（一九三五年）等と銘打って卒業生姓名を掲載しているが、影印版では三〇年から三三年まで当該記事が削除されている。

(15) 『滿州開発四〇年史』（全三巻、滿州開発四〇年史刊行会、一九六四―六五）。
『滿州帝國總攬』（日本外事協會編、三省堂、一九三四）。
「中國留學의(の)案內」廣州中山大學法學院研究室　具益均、『朝鮮日報』一九三三・六・一、六、一七、二〇、二二。
「中國에(に)留學하라(するなら)면」南京에서(より)　玄哲燮、『朝鮮日報』一九三四・一二・八、一一、一二、一四、一八、二〇。
これらのいずれにも「西＊(ママ)大學」は見当たらない。

(16) 明川郡上雲北面富禾洞。

(17) 一九三五年一月一日、『朝鮮日報』新春懸賞文芸に入選した際の住所は、「咸北明川郡西面龍洞」となっている。

(18) 『東亞日報』一九三八・一・一一。

(19) 「日本大学芸術学部の沿革と概要」『日本大学芸術学部卒業生名簿』（昭和59年度版　一九八五年）二頁。

(20) 柳呈「好漢孤獨　金鍾漢」（『現代文學』一九六三・二）二八九頁。

(21) 一九三九年三月に日大を離れたことから逆算した。

(22) 『詩苑』第一號（一九三五・二）誌上の「三大新聞新春懸賞當選詩歌抄」に再録された「베짜는색시」は除外。

(23) 前掲「好漢孤獨　金鍾漢」二九〇頁。

(24) 日大芸術科は、戦後まもなくの火災で戦前の学籍簿等をすべて焼失した。唯一神田の日大本部に残っていた卒業証書作製のための「卒業者名簿控」にも、また後年口コミで作製された『日本大学芸術学部卒業生名簿』にも、金鍾漢の名前は見当たらない。さらに、『文章』一九三九年九月號に掲載された「나(わたし)의(の)作詩設計圖」の「略歴」に「鏡城高普를(を)　卒業하고(して)　日大에(に)修學하다(する)」（傍点は引用者）とあるので、中退と判断した。

(25) 「文化の一年―一文化人の眼に映つたもの―」（『新時代』一九四三・一）四八頁。

(26) 一九三九年九月に創作科に編入学した金達寿は、著書『わがアリランのうた』（中央公論社、一九七七）の中で、次のように述懐している。
「（前略）その藝術科の創作科からは文学同人誌のような『藝術科』という雑誌が出ていたのも、私にとっては一つの魅力だった。『藝術科』は学生から徴集した実習費によってだされているもので、同人誌ではなかったが、しかしそれも文壇的には同人雑誌の一つとして扱われ、当時出ていた早稲田系の北条誠や宮崎耿平（後の康平）らが中心となっていたのではなかったかと思う『阿呆』などとともに、有力なそれの一つとしてみられていた」一七八頁。
「そして創作科の同級には、詩人の中桐雅夫が神戸商大からわざわざ転学してきているのもおもしろかったが、（中略）私は間もなく中桐雅

夫たちといっしょに文芸部員となり、雑誌『藝術科』の編集にあたることになった」一八六頁。

(27) 『藝術科』(第六巻第六號、一九三八・六)に「朝鮮風物詩 (一)」と題して「古井戸のある風景」の日本語訳が掲載されている。これは後に『たらちねのうた』および『雪白集』に収録されたものとは内容が異なっている。朝鮮語での初出は、『朝光』同年九月號。また、『たらちねのうた』『雪白集』に収められているものの朝鮮語での初出は、林和撰編『現代朝鮮詩人選集』(學燈社、京城、一九三九)一八六頁。

鍾漢は日大中退後の三九年五月『藝術科』第七巻第四號にも、「歸路」「旅情」の二篇の日本語詩を発表している、このうち「歸路」は同年四月に朝鮮語で『文章』推薦欄に入選したものと同じ。

(28) 当時の編集長は中村正利。

(29) 目次の署名は「金鍾漢」(傍点は筆者)。

(30) ただし、同誌四〇年九月號から一二月號、および四一年五、六、一二月號は未見のため、上記の號に鍾漢が何らかの記事、あるいは作品を掲載している可能性がある。

(31) 金鍾漢は『國民文學』四二年三月號、すなわち同年二月頃より同誌の編集に携わるようになったことが、同號の「文壇消息」(七六頁)に見える。

(32) 宮田節子『朝鮮民衆と「皇民化」政策』(未来社、一九八五)に改題されて所収。

(33) 同右、一八四頁より再引用。

(34) 同右、一五一頁より再引用。

(35) 同右、一一八頁より再引用。

(36) 同右、一六六頁より再引用。

(37) 前掲「佐藤春夫先生へ」七五頁。

(38) 『國民文學』誌主幹としての崔載瑞の文学的営為については、三枝壽勝氏が、詳細な検討を行っている。

「状況과 文學者의 姿勢—日帝末期親日文學의 경우」(慶熙大学校 碩士学位論文、一九七六)。

「屈伏과 克服의 말」(『文學과知性』八巻二號、一九七七。『植民地時代의 文學研究』깊은샘 一九八〇、に再録)

前掲「一九四〇年代前半期の小説について」

(39) 座談会「詩壇の根本問題」(『國民文學』一九四三・二)一二頁。

(40) 前掲「文化の一年」四九頁。原文を次に示す。

「(前略)朝鮮のジャアナリズムは、津田剛の主幹してゐる『緑旗』ほど鮮明な性格を持つものはないやうである。ただ、讀者の大部分が内地人であるのが、この雑誌の意圖の客観性をさびしくする。

同じ國民的なものの追及を目標にしてゐても『國民文學』になると朝鮮人に呼びかけるための妥協性を止揚してきたやうだ。崔載瑞と金鍾漢の共同企畫であつたが、金が戯になつてからは多少性格がぐらついてきたやうである。（勿笑）」

また、金達寿「太平洋戦争下の朝鮮文学―金鐘漢の思い出を中心に―」（『文学』、岩波書店、一九六一年八月号）には次のような一節がある。

「（前略）前記の崔載瑞は金鐘漢の直接の上司でもあったので、当然、私は彼について金鐘漢にきいたこともあった。だが、金鐘漢は「いや―」といって彼についてはほとんど語ろうともせず、「あんなものは―」という意味を言外にただよわせたばかりだった」八三頁。

金達寿と金鍾漢は同じ下宿にいたことがある。この下宿のことについては、金達寿が「司諫町五七番地」という小説を書いており、金鍾漢は「金章煥」という名で登場する。

(41) 「鍾」と「鐘」の現代朝鮮語漢字音はともに종（jong）である。

四三年以前に署名が「鐘」漢となっているのは、三九年八月『婦人畫報』に掲載された「露領の見える街」において、本文ではなく目次で（註（37）参照）、および同年一一月『モダン日本　朝鮮版』掲載の翻訳詩、また四〇年四月『朝光』に掲載された「泊」の三度のみである。単なる誤植であったのを、鍾漢が思いついて筆名にしたのではないか。

(42) タルバッチブは달밭집であり、直訳すると「月の畑の家」となるが、鍾漢の詩「急性肺炎（遺作）」（『新時代』一九四四年一一月號）の前書きには、「祖父危篤の電報に接し、歸郷中汽車のなかで急性肺炎にかかり、祖父の葬式にも立會へなかつた。死ぬのかと思つた。村の人たちは、一時、月田家（タツバッチブ）の若主人が死んだと噂したといふ」とあり、また、『たらちねのうた』の「あとがき」には、「私の家も田毎の月のまんなかに古びかかつてゐる」という記述がある。

(43) 鍾漢が創氏名で署名しているものは次の四つである。

「金東煥抒情詩集『海棠花』」（『國民文學』一九四二年七月號）一一五頁。

「朝鮮文人協會編『朝鮮國民文學選集』」（『國民文學』一九四三年七月號）一〇四頁。

前掲「文化の一年」。

「生成하는文學精神」『毎日新報』一九四四・七・一四～一六。

(44) 『定本　横光利一全集』第十四巻、河出書房新社、一九八二年、二七七頁。「朝鮮のこと」（初出は『毎日新聞』、一九四三年七月三〇、三一日）。

『中野重治全集』第十九巻、筑摩書房、一九六三年、四六八～四七〇頁。

(45) 鄭飛石氏の筆者への書信による。

(46) 前掲「露領の見える街」。

(47) 「明川杵搗き節」は三・三調で一節は六行。また「鴨緑江うねうね」は一節が五行であったが、「鴨緑江の娘」では前者の五行目を四行目に挿入してある。
(48) 前掲『韓国歌謡史　1895－1945』二一五頁。
(49) 同右、一七一頁。
(50) 『朝鮮日報』一九三七・二・六、七、九、一三。
(51) 同右、六日。
(52) 同右、九日。
(53) 『朝鮮日報』一九三七・二・二〇、二一、二三、二四。
(54) 同右、二四日。
(55) 前掲「金鍾漢の人及作品」六七頁。
(56) 『たらちねのうた』に収められた、鍾漢自身の訳を参考のため挙げておく。

空山明月

むらは　よるのなかにしづみ
よるは　かへるのなきごゑのなかにしづみ
ひがともる　ふたつ　ひとつ
かへるのなきごゑのなかに

さて
よつぱらいのつきがでてきて
しろがねのむらを　はきだすのです

(57) 「歸路」の鍾漢自訳は、一九三九年五月『藝術科』第七巻第四號に掲載されたものと、一九四四年三月『朝光』三月號に掲載されたものの二つがあり、若干の異同があるが、本文では前者に依った。
また、「古井戸のある風景」は、鍾漢の両詩集ともに収められているが（若干異同あり）、本文では『たらちねのうた』所収のものに依った。
前掲『藝術科』第六巻第六號（一九三八年六月）に掲載されたものを、参考のため挙げておく。

古井戸のある風景

しだれ柳はおいぼれた井戸の守衛である。
井戸の底には國寶のやうに青空の破片が落ちてゐる。

そのあたりの構圖をととのへるために
あたまに水甕をのせて乙女がはいつてくる。
乙女はつるべをあふれる青空にくみあげる。
乙女はつるべをあふれる傳説をくみあげる。

乙女はかへつてゆく。
南畫風の餘韻を落としものにして。

何處かで牛のなきごえが悠長を流してくる。
村の春は構圖の背景をひるねしてゐる。

(58) 鄭芝溶「詩選後」(『文章』一九三九年四月號)一三二頁。大村益夫訳は、前掲「金鍾漢について」四七〇頁。
(59) 鄭芝溶「詩選後」(『文章』一九三九年八月號)二〇三頁。
(60) 前掲『朝鮮民衆と「皇民化」政策』、二四頁より再引用。
(61) 同右、三〇頁より再引用。
(62) 初出(『國民文學』一九四二・一)に依った。『たらちねのうた』『雪白集』ともに収録されており、それぞれ語句等に若干の異同がある。なお、末尾の反歌は『たらちねのうた』では「あとがき」に移され、『雪白集』では削除されている。意図が露骨で、声高な掛け声はもはや必要ないものだったのだろう。
(63) 「新しき史詩の創造」(『國民文學』一九四二年八月號)二一頁。
(64) 躑躅は北方でよく見られる花。柳(高麗しだれ柳)は、鍾漢の詩において、故郷と家族の象徴としてたびたび登場する。
(65) 「一枝の倫理」(『國民文學』一九四二年三月號)三二頁。
(66) 初出(『國民文學』一九四二年七月號)に依った。『たらちねのうた』『雪白集』ともに収録されており、それぞれ語句等に若干の異同がある。

(67) 初出（『國民文學』一九四二年一二月號）に依った。『たらちねのうた』にも収録。若干の異同がある。

(68) ジュール・ロマンが提唱したもので、一体主義と訳される。「集団の中に生きている一体的な人間の概念、群衆そのものを一体にするある調和的な魂の直感的認識」と定義される。

(69) 初出（『國民文學』一九四二年四月號）に依った。『たらちねのうた』『雪白集』ともに収録されているが、それぞれ若干の異同がある。

(70) このことから、鍾漢は当初『たらちねのうた』の書名を『一枝について』にするつもりであったことがわかる。『たらちねのうた』について触れておく。鍾漢の第一詩集『たらちねのうた』は一九四三年七月五日、人文社より発行された。内容は次の通りである。

なるかみのうた
待機　幼年　童女　一枝について（「園丁」改題—筆者注）　合唱について　子福　風俗
たらちねのうた
雲と老人　空山明月（「故園の詩」改作—筆者注）　古井戸のある風景　善夫孤獨　行状（33年3月『別乾坤』に発表された「決算外一篇」と題した詩のうちの「巨鐘（普信鐘）」及び、43年2月『春秋』に発表された「巨鐘」を改作—筆者注）　雷（「할아버지」改作—筆者注）
あとがき

(71) 「文報回覧板」、朝鮮文人報国会事務局、（『國民文學』一九四三年七月號）九七頁。

(72) 八月一日　金基鎭、三日　金村龍濟（金龍濟）、四日　金尚鎔、五日　盧天命、六日　金鍾漢、七日　白山青樹（金東煥）、八日　異河潤。

(73) 「系譜」（『文章』一九三九・八、推薦詩当選作）を日本語で改作。

(74) 鍾漢の第二詩集（訳詩集）『雪白集』は一九四三年七月二〇日、博文書舘より発行された。内容は次のとおりである。

善夫孤獨（序詩）
「壽之章」鄭芝溶—白鹿潭。冬篭り。九城洞。朝餐。毘盧峯。玉流洞。長寿山。瀑布。躑躅。
「福之章」洪思容—火祭の歌。鄭芝溶—ながれぼし。白石—髪の毛。湯薬。焚火。金東煥—ぬれぎぬ。朱耀翰—鳳仙花。鄭芝溶—赤い手。
金鍾漢—古井戸のある風景。金尚鎔—晴耕。
「富之章」白石—杜甫や李白の如く。澡唐にて。南瓜の種子。安東。柳致環—首。
「貴之章」金鍾漢—園丁。合唱について。風俗。幼年。

あとがき

各章の扉にはそれぞれ、「月白雪白天地白／山深夜深客愁深／金笠」、「道のしり木幡乙女は爭はず／寢しくをしぞも愛しみ思ふ／古事記」、「遼野何時盡／一旬不見山／曉星飛馬首／朝日出田間／燕嚴」、「我等之金鍾漢詩人前　鄭芝溶（鄭芝溶詞伯が著者に贈つた詩集の見返し）」といった詩句や筆跡が付され、また、序詩とあとがきはまとめて「囂之章」と名付けられている。

(75) 『毎日新報』一九四二・二・一七。

(76) 前掲「佐藤春夫先生へ」七二頁。また、前掲「好漢孤獨　金鍾漢」にも次のような記載がある。「（前略）朝鮮には数は多くないが、日本の万葉集や古今和歌集に劣らぬ古謡があるので、私はその日本語訳を計画中です。そう鍾漢が言うと、佐藤氏は少なからぬ関心を見せて、出来次第すぐにちょっと見せてくれ、と言った」（試訳）二九〇頁。

(77) 「바다・孝石・下宿」（『春秋』一九四二年七月號）一四一頁。

(78) 同右、一四二頁。

(79) たとえば次のような箇所である。

「なかんづく耐えられない侮辱は―余をば将軍ボナパアトと呼ぶ、こんな侮辱は未だかつて余は受けたことすらない。身のほど知らずにもほどがある。天理を辨へぬ輩、将軍ボナパアトとは何事ぞ。イギリスの輩は何と言はうと、あくまで余は皇帝・ナポレオンなのだ。皇帝なのだ。いつまでも變ることのない皇帝なのだ。千萬年にただひとり、群星の中でも帝王星である皇帝として生れ、皇帝として生を終へるばかりなのだ」七一頁。

(80) 前掲「佐藤春夫先生へ」七四頁。

(81) 「まつろふ文學」（『國民文學』一九四四年四月號）六頁。

(82) 「国民文化の方向」（『國民文學』一九四三年八月號）二〇頁。

(83) 前掲「一枝の倫理」三〇頁。

(84) 「詩文學의正道―참된「詩壇의新世代」에게―」（『文章』一九三九年一〇月號）二〇二頁。

(85) 「詩壇時評」（『文章』一九四〇年一一月號）一五五頁。

(86) 座談会「詩壇の根本問題」（『國民文學』一九四三年二月號）一九頁。

(87) 「兵制と文學」（『新時代』一九四三年八月號）三三～三四頁。

(88) 前掲「詩壇時評」同頁。

(89) 前掲「金鍾漢の人及作品」六七頁。

(90) 「現代詩와모뉴멘털리즘（―とモニュメンタリズム）詩論＝時論＝試論 ①」『東亞日報』一九三九・一一・一四。
(91) 前掲「文化の一年」五〇頁。
(92) 『たらちねのうた』「あとがき」四二頁。
(93) 前掲「新民謡の精神と形態」『朝鮮日報』一九三九・二・一三。
(94) 前掲「朝鮮詩壇の進路」『朝鮮日報』一九四二・一一・一七。
(95) 前掲「新民謡の精神と形態」『朝鮮日報』一九三七・二・九。
(96) 『たらちねのうた』「あとがき」四二～四三頁。
(97) 前掲「朝鮮詩壇の進路」『朝鮮日報』一九四二・一一・一五。
(98) 同右、一四日。
(99) 前掲『「酔いどれ船」の青春』一〇七頁。
(100) 金允植（大村益夫訳）『傷痕と克服 韓国の文学者と日本』（朝日新聞社、1975、原題『韓日文學의(の) 關聯樣相』）一四一～一四二頁。
(101) 前掲「一九四〇年代前半期の小説について」一二四頁。

年譜

＊ 本文では満年齢を用いたが、年譜では朝鮮の慣用に従い数え年を用いた。
＊＊ 作品名の下に付記した略号はそれぞれ、民＝民謡、流＝流行歌、評＝評論、随＝随筆、座＝座談会、を指す。朝鮮語作品は略号を（ ）で、日本語作品は〈 〉で囲み区別した。なお、『國民文學』の「編集後記」はすべて日本語で書かれている。

一九一四年　一歳
二月　28日　咸鏡北道明川郡西面立石洞に生まれる。生家は農家で달밭집（タルバッチブ）と呼ばれていたらしい。
一九一五年　六歳
春　医師であった伯父のもとへ養子にいく。養父は清津（チョンジン）で開業。生母と養母の間で不遇な幼年時代を過ごす。
養父の開業地に伴い、慶興（キョンフン）、雄基（ウンギ）、等を転々とする。

一九三〇年　一七歳

この頃養父死亡。

一九三三年　二〇歳

一月、鏡城高等普通学校在学中に詩「激流」が学生文壇佳作として『東光』に掲載される。

平安道、満州を放浪。金億を知り、再び詩歌修業を志す。

一九三四年　二一歳

三月、『別乾坤』第一回新流行小曲大懸賞に「임자업는나루배」が当選。四月、第二回同懸賞に「빨내하는색시」が佳作入選。

一九三五年　二十二歳

一月、『朝鮮日報』新春懸賞文芸に「베짜는색시」が当選。故郷の私立校（雩城学校）に在校。

月	題名	掲載誌紙名	日付
1	激流（詩）	東光	
3	임자업는나루배（流）	別乾坤	
〃	決算外一篇（詩）	中央	
4	빨내하는색시（流）	別乾坤	
1	베짜는색시（民）	朝鮮日報	2日
〃	남어지이한밤（〃）	〃	27日
2	베짜는색시（〃）	詩苑	
〃	雪景（詩）	東亞日報	8日
〃	얄루강구비구비（民）	朝鮮日報	〃
5	셋집、田園（詩）	朝鮮中央日報	18日
10	『詩』午後세시（〃）	〃	17日
11	車窓詩篇／車窓、郷愁（〃）	〃	26日
12	그늘（〃）	學燈	
〃	除夜吟（〃）	朝鮮中央日報	
〃	그늘、파잎（〃）	朝鮮文壇	24日

一九三六年　二十三歳

一月、『東亞日報』新春懸賞文芸に「望郷曲」が当選。

1	望郷曲（民）	東亞日報	4日
8	民謡를通해본　吉州・明川　（評）	朝鮮日報	7～9日

一九三七年　二十四歳

前年もしくはこの年秋頃までに渡日。日大専門部芸術科に入学。

2	新民謡의精神과形態（評）	朝鮮日報	6
7	마전타령（民）	東亞日報	7
9	白頭山打鈴　伐木歌（民）	詩建設	9 13日

一九三八年　二十五歳

一月、『東亞日報』新春懸賞文芸に「明川방아타령」が佳作入選。

三月、『朝鮮日報』主催流行歌懸賞募集に「얄루江處女」が当選。この頃、佐藤春夫を訪問し以後師事する。

1	明川방아타령（民）	東亞日報	12日
3	얄루江處女（流）	朝鮮日報	29日
4	海峡의달（俗謡）	〃	25日
6	朝鮮風物詩（一）／古井戸のある風景〈詩〉	藝術科	
9	낡은우물이있는風景、未亡人Rの肖像（詩）	朝　光	
10	빨래질（民）	女　性	
〃	시집憧憬　讀後感（評）	海　峡	
11	女人二題／未亡人Rの肖像、生活（詩）	朝　光	
12	卒業을앞둔藝術의殿堂에서（随）	朝鮮日報	26日

一九三九年　二十六歳

三月、日大専門部芸術科を中退。

春頃から、婦人画報社に勤務。

1	낡은우물이있는風景（詩）	現代朝鮮詩人選集（林和撰編）	
4	歸路（詩）	文　章	
5	歸路、旅情〈〃〉	藝術科	

四月、『文章』推薦欄に「歸路」、
六月、同欄に「故園의詩」「그늘」
八月、〃「할아버지」「系譜」が当選。推薦を完了し、
九月、「나의作詩設計圖」を発表して、詩壇にデビュー。

6	故園의詩、그늘（〃）	文　章	
8	할아버지、系譜（〃）	〃	
〃	路傍、山中（〃）	東亞日報	18日
〃	露領の見える街〈掌編〉	婦人畫報	
〃	詩人が語つた「新しさ」について〈随〉	婦人畫報	
9	나의作詩設計圖（評）	文　章	
10	詩文學의正道ー참된「詩壇의新世代」에게ー（評）	〃	
〃	海港（詩）	東亞日報	26日
〃	雪景（〃）	詩建設	
〃	夏期休暇、길（〃）	白　紙	
11	白石「焚火」、朱耀翰「鳳仙花」、鄭之溶「白鹿潭」〈訳詩〉	モダン日本　朝鮮版	
〃	詩論＝時論＝試論①現代詩와모뉴멘털지즘（評）	東亞日報	14日
〃	詩論＝時論＝試論②에피그램의抒情詩的価値（〃）	東亞日報	15日
〃	길（詩）	文　章	
12	新制作派展（詩）	東亞日報	14日

一九四〇年　二十七歳

四月頃、生父死亡。
夏、『婦人畫報』朝鮮特集号を出すために「京城」に滞在。李孝石に手紙で日本語作品を依頼し、以後文通する。

1	詩壇新世代　性格　上（評）	東亞日報	21日
〃	〃　下（〃）	〃	23日
2	連峯霽雪의（詩）	文　章	
〃	藝術에잇어서의非合理性　上（評）	東亞日報	22日
〃	詩語問題・피카서의原畫　下（〃）	〃	24日

十月初旬、『婦人書報』朝鮮版出版のため朝鮮に赴き、20日頃、東京に戻る。

一九四一年　二十八歳

秋頃、S房から詩書のシリーズとして「朝鮮詩集」を依頼されるが立ち消えとなる。

一九四二年　二十九歳

前年の暮れ、もしくはこの年二月までに朝鮮に戻る。

二月頃より、『國民文學』の編集に携わる。

3	詩壇改造論（評）	朝　光	
4	泊（詩）	〃	
〃	朴南秀詩集「초롱불」（빡・레뷰ー）（評）	東亞日報	20日
5	돌（詩）	朝　光	
8	朴鍾和「白魚のような白い手が」、金尚鎔「螢」、金東煥「罪」、金億「西關」、林學洙「哈爾賓驛にて」〈訳詩〉	モダン日本　朝鮮版	
11	살구꽃처럼（詩）	文　章	
〃	詩壇時評（評）	〃	
1	詩壇時評（評）	文　章	
〃	朝鮮文學の基本姿勢〈評〉	三千里	
4	航空哀歌（歸還抄）（詩）	文　章（廃刊號）	
8	憎悪の倫理　上（随）	毎日新報	6日
〃	〃　下（〃）	〃	7日
10	秋風吟抄／月色、其二（詩）	〃	16日
〃	〃　②／박꽃에부티는抒情（詩）	〃	17日
12	明川（詩）	〃	8日
〃	朱乙（〃）	〃	12日
1	園丁〈詩〉	國民文學	
3	南方에의招待（随）	大東亞（三千里　改題）	
〃	一枝의倫理　（評）	國民文學	
〃	春服（詩）	毎日新報	16日

六月、京城府明倫町（現鍾路区明倫洞）に引っ越す。
七月、金東煥抒情詩集『海棠花』の書評において、初めて「月田茂」と創氏名を使用。
一二月　4日から、徴兵制実地に先立つ宣伝策として、朝鮮文人協会では殉国英霊の遺家族を訪問。咸鏡南道に赴く。

4	合唱について〈詩〉	國民文學	
〃	佐藤春夫先生へ〈随〉	〃	
〃	短歌門外漢〈随〉	緑旗	
〃	新しい半島文壇の構想〈座〉	〃	
6	弱冠〈詩〉	東洋之光	
〃	風俗〈詩〉	國民文學	
7	바다・孝石・下宿（随）	春秋	
〃	幼年〈詩〉	國民文學	
〃	金東煥抒情詩集『海棠花』〈書評〉	〃	
〃	軍人と作家・徴兵の感激を語る。〈座〉	〃	
8	新しき詩史の創造〈評〉	〃	
〃	李孝石「皇帝」〈翻訳〉	〃	
9	國語工夫記　古事記와萬葉과写生文（燈火随想　上）（随）	毎日新報	2日
〃	文壇工夫記　重量과天才의作家（燈火随想　中）（随）	〃	3日
〃	沈思默考記　會席敬遠과讀書（燈火随想　下）（随）	〃	5日
10	編集後記	國民文學	
11	朝鮮詩壇의進路－特히國民詩와關聯하야－(1)～(5)（評）	毎日新報	13～17日
〃	國民文學の一年を語る〈座〉	國民文學	
〃	編集後記	〃	
12	待機〈詩〉	〃	
〃	明日の朝鮮映画を語る〈座〉	〃	

一九四三年　三十歳

四月　17日、朝鮮文人報国会結成。詩部会幹事に選出される。

29日、火野葦平、上田広、井上康文の三名の従軍作家を迎え、朝鮮文人報国会主催の半島ホテルでの歓迎懇談会に出席。

五月、京城日報出版局校閲部員であった金達寿と、鍾路区司諫町五七李元周方の下宿で出会う。

27日、海軍記念日にあたり、文人報国会詩部会主催で鍾路青年会館において「海軍을讃하는詩朗読会」を午後七時より開催。詩「待機」を朗読。

『國民文學』を離れ、客員となる。

七月　5日、『たらちねのうた』を刊行。

10日、詩部役員会。11～12日、米英撃滅のための辻詩街頭移動展。12日「海」を朗読・放送。

この頃、中野重治と書信往来。

20日、『雪白集』を刊行。著作者住所は、京城府明倫町四ノ二〇六ノ三三となっている。

秋頃、毎日新報社発行の日本語週刊誌の記者となる。同僚に鄭飛石がいた。同氏の記憶によれば、鍾漢は不遇な生い立ちの故か、女性に対する憧れが非常に強かったという。

1	朝陽映發〈新春의祈願〉〈詩〉	毎日新報	9日
〃	榮譽의遺家族을차저서〈ルポ〉	毎日新報	16日
〃	文壇点描〈評〉	文化朝鮮	
〃	鰯抒情〈随〉	新時代	
2	巨鐘〈詩〉	春　秋	
〃	詩壇の根本問題〈座〉	國民文學	
〃	編集後記	〃	
3	新進作家論〈評〉	〃	
〃	編集後記	〃	
4	文學賞について〈評〉	文化朝鮮	
5	編輯神話	國民文學	
〃	海洋과朝鮮文学〈評〉	毎日新報	26
6	海〈辻詩〉	國民文學	28
〃	戰爭と文學〈座〉	〃	30
〃	編集後記	〃	31日
〃	思想の誕生〈評〉	新時代	
〃	童女〈詩〉	文化朝鮮	
〃	朝鮮の詩人たち〈文化消息〉	〃	
7	樹〈辻詩〉	國民文學	
〃	朝鮮文人協会編「朝鮮國民文學選集」〈書評〉	〃	
〃	映畫「若き姿」を語る〈座〉	〃	
〃	編集後記	〃	
〃	『たらちねのうた』を人文社より刊行。		
〃	『雪白集』を博文書舘より刊行。		

8	님의부르심을받들고서〈詩〉	毎日新報	6日
〃	草奔〈辻詩〉	國民文學	
〃	國民文化の方向〈座〉	〃	
〃	偶語二題〈文化消息〉	文化朝鮮	
〃	兵制と文學〈評〉	新時代	
9	文學鼎談〈座〉	國民文學	
〃	海洋創世〈詩〉	文藝（東京）	
〃	放送局の屋上で〈詩〉	新時代	
10	むすめ座談会（嶺乾一と共に司会）〈座〉	〃	
11	（題名不明　未見）	朝鮮詩歌集（道久良編　国民詩歌発行所）	
12	朝鮮のこころ〈随〉	朝　光	
〃	老子頌歌／弱冠、墳墓〈詩〉	春　秋	
〃	文化の一年―一文化人の眼に映つたもの―〈評〉	新時代	

一九四四年　三十一歳

祖父危篤の電報を受け帰郷中、汽車のなかで急性肺炎にかかる。
九月　27日朝、急逝

1	龍飛御天歌〈詩〉	國民文學	
〃	龍飛御天歌〈〃〉	新時代	
3	連峯霽雪、雪中故園賦〈詩〉	春　秋	
〃	歸農詩篇／族譜、歸路、染指鳳仙花歌〈詩〉	朝　光	
6	金剛山、瀑布〈〃〉	新時代	
7	生成하는文學精神①～③（評）	毎日新報	14～16日
9	白馬江、百濟古甕賦〈詩〉	朝　光	
11	急逝肺炎／くらいまつくす、快癒期〈詩〉	新時代	